

多摩紀行 三つの市など

小沢 芳治

二〇一〇年。私は、この年の初めから時間を見つけて、自分が現在も住んでいる八王子を手始めに、青梅、羽村、あきる野、桧原、立川、府中、東村山、清瀬、三鷹など、多摩の各地を訪ね歩いてきた。当初は多摩巡りの期間も、せいぜい半年と思っていたが、訪ねるべきところ、くり返し行きたい場所が次々に出てきて、いつの間にか秋を迎えて過ごし、やがて年を越してしまった。

○ 紀行のきっかけ

野市にある両親の眠る西多摩霊園に行くようになり、その足で羽村の母の生家もしばしば訪ねた。その家で偶々見せてもらった本に、母の父・並木善助が、大長編『大菩薩峠』の作家・中里介石と一緒に撮った写真が載っていた。二人は幼馴染で、撮影は一五歳の時のものであった。こんなことさえ知らなかった。

一方、母の遺した文章・日記を整理していると、母が晩年、ノートに書いていた俳句に、「足なえてふるさと遠くなりけり」という、老いて病み、帰郷のままならぬ思いを託した作があった。私にもそういう日がやがて来る。毎月の墓参りの際には、あきる野、羽村ばかりではなく、途中の川口地区など八王子の北西部、足をすこし伸ばせば青梅や奥多摩各地にもたやすく行ける。

それなら、この機会に、これまで関心を持ってたり、行ったりしたことなかった多摩の南部・東部地域にも出かけ、多摩全体のことを身体で知ってみよう、という気持ちで次第に募り、二〇一〇年を多摩巡りで始めることにした。この一年間で多摩全域のそれなりの数の場所には出かけた。しかし二〇一一年になると早々から、やむを得ない事情が重なり二、三か所を除くと、多摩巡回を四か月ほど中

正直いって、私は若い頃から、この二年ほど前までは、自分が生まれ育った八王子、今は亡き父と母の出身地である青梅、羽村、高校時代の三年間を過ごした立川、の四市を含め、多摩地方について知ろう、勉強しようという気はなかった。学生時代から一貫して、広くナショナルなことや、アジア・世界のことを自分のものになりたいと思ってきた。

ところが、二年前（二〇〇九年）の八月二日に母が亡くなり秋以降、一年間は命日ごとに毎月、お墓参りをしようと妻の運転する車で、八王子と羽村のほぼ中間、あきる野断した。五月に再開したが、期限をつけないとまとめられないと思ったので、今回は七月末で締め切ることにした。

なお、地理的に多摩地方とは、東京都のうち二三区と島嶼部以外の地域で、現在、大小三〇の市町村があり、東京都の人口の約三分の一、四〇〇万人が住んでいる。記述が二年間にわたっているため、ただ「一月」「六月」などと書いた場合は、「二〇一〇年」のことで、二〇一一年に関わる場合は、「今年」を付した。取り上げる人物について故人については敬称を略した。地名・寺名などに必要に応じてルビを付し、植物名はカタカナにした。

○ 初めての見聞

一月六日、多摩南部の町田市に出かけたのが、多摩紀行の初日だった。その日は、日本近代の初期（一八七〇～八〇年代）、多摩に澎湃と起こった自由民権運動に関する資料の宝庫・町田市立自由民権資料館と、その当時、鮮烈な光彩を放った詩人・北村透谷が、妻となる石阪美那子と出会った「民権の森」を訪ねた。

それから大体四月頃までは三〇の市町村に、頻度はと

もかく、「くまなく」出かけ、その地域特性を知ることをめざした。そうした意図から重点的に訪ねたのは、各地方自治体の歴史・地理・現況などを総合的に紹介する、公営の「郷土資料館」（博物館、歴史館、歴史民俗館、資料室など名称は様々である）で、その数は、郷土資料館のない市町もあつたので二四（「小平ふるさと村」を含む）であつた。

これらの郷土資料館を訪ねて二、三か月もすると、私は、その多くで共通に展示されている三つの多摩先住民の「遺産」があることに気づき、強くひきつけられた。

それは、「原始」多摩人の残した多彩な縄文土器と、「中世」多摩人の篤い信仰の証しである板碑（青石塔婆）、さらに「近代」多摩人も、近県の人たちと同様に全身全霊で取り組んだ一大産業・養蚕業である。

当初は、それらについて何とか整理できると思ったが、どれ一つをとつても、調べるほど中味は深く広がった。ことに縄文土器と板碑について、私には、せいぜい何処の郷土資料館にどんな逸品が展示されているか、を紹介する程度のことしかできない、と思つた。ただ、蚕の繭から作られる「生糸」は、日本の開国（一八五九年）以来、横浜港

から大量に輸出されて日本近代化の最大の資金源となり、しかも私の生まれた八王子は、関東西部の養蚕地帯と横浜を結ぶ一大結節点であつた。

加えて、妻の車で、多摩の各地や隣県（神奈川県・山梨・埼玉）、近県（群馬・栃木・茨城）を車で回っていると、かつて養蚕をやっていた家の証である「越し屋根」（換気用のミニ屋根、「柅」、「櫓」などともいう）の家がまだ残っていた。私には、それらの家が皆、南、すなわち横浜方面、さらに海外に向かつてるように見えた。横浜にも何度も行つた。しかし、近代日本における養蚕・生糸の役割については調べるべきこと、訪ねなければならぬ場所が多すぎて、多摩をはるかに超えてしまう。これは別の機会に譲ることした。

今回、多摩にも名刹・古刹が少なくないと気づいたのも、郷土資料館巡りのお陰であつた。三月中旬、奥多摩町に行くJ R青梅線・二俣尾駅の直前、電車の窓から見た海禅寺、瞬間的に「これは素晴らしいお寺だ」と思い、帰りに同駅で降りて訪ねた。すでに二百年の歳月を経た荘重な山門と、深い慈愛さえ感じさせる本堂、さらに中世の青梅地方の並ぶ者のない支配者・三田氏の供養塔もある、

実に由緒ある曹洞宗のお寺であつた。これが発端で、それ以降は、お寺も重要な訪問対象になつた。

中でも青梅の諸寺と、五日市市を流れる秋川の南岸の丘に立つ広徳寺、江戸時代から関東でも屈指の名刹・立川の普濟寺、東村山の正福寺にはくり返し行った。この三寺はいずれも臨済宗建長寺派に属しており、そうなるとうますます、自分の仏教や真言・曹洞・臨済など仏教宗派についての知識の不足を痛感した。それを補うには時間はなかつた。今回、青梅のお寺と正福寺については訪問の記録として取り上げるが、これからも多摩の諸寺に四季折々に赴き、私なりに整理してみたい。

遅ればせながら、その大変な価値に気づいたのが「玉川上水」であつた。この水道用の人口水路は江戸時代の前期（一六五四年）に開削され、幕府開設以降、人口の急増した首都・江戸、次いで東京の住民に三五〇年以上、飲料水を届けてきた。一〇月に二日間、飛んで今年五月に一日、の計三日間をかけて、母の故郷、上水の取入口のある羽村から福生・拝島・立川・小平・小金井・武蔵野・三鷹を経て、その水路の上部が開かれた「開渠部」が終わる、杉並区富士見ヶ丘の「浅間橋」と呼ばれる場所（橋そのもの

は現在ない）まで、約二八キロを歩いた。その際、羽村市郷土博物館の労作『玉川上水散歩マップ』（二〇〇五年刊）に散策ガイドの役割を務めてもらった。ありがたかつた。

歩いてみると、「近世」多摩人の一大遺産は、上水に架かる数多の橋から見える素晴らしい水辺の光景と、ケヤキ、コナラ、イヌシデ、クヌギ、サクラなどの枝葉で覆われた長い緑の遊歩道になって保存されていた。私がその中ほどに立つた橋は羽村橋・平和橋・見影橋・小川橋・商大橋・関野橋・むらさき橋・岩崎橋など約八〇になつた。これだけの数の橋から上・下流を眺める楽しみが、私をなんとか「浅間橋」まで歩かせてくれた。

その一方で、水道原水としてなお使用されている水量豊かな「小平監視所」までの上流部分は別にして、下水を高度処理した再生水を用いる下流部分（約一八キロ）は、水量がずっと少ないのはともかく、下れば下るほど、樹木が今にも崩れ落ちそうな堀の壁面が至るところで見られたし、視界を著しく遮る灌木・雑草の野放図な繁茂という難問もかかえていた。

私にとってさらに困つたのは、一息入れるベンチが全体を通して少ないことで、特に三鷹橋から「浅間橋」まで

の五キロほどでは、若草橋の袂にしか見当たらなかった。東京都は、二〇〇九年から一〇年間の「史跡玉川上水整備活用計画」に基づき、護岸工事・樹木伐採・散策路の改善、などを進めると言うが、一日も早いことを願うばかりである。

私の今回の多摩巡りに楽しさを添えてくれたのは、ダイナミックで華やかな民衆的な遺産、各地のお祭りであった。五月に、心から感動した府中の大國魂神社例大祭「くらやみ祭」を最初の弾みに、八月の「八王子祭り」、九月、あきる野市の「しようが祭り」と「五日市祭り」、奥多摩湖畔にある小河内神社、立川砂川地区の阿豆佐味天神社の祭礼、一月三日、東村山・正福寺の「地藏まつり」、二月三日には、六台の壮麗な笠鉾・屋台で有名な「秩父夜祭」にも出かけた。

今回初めて見たお祭りの芸能の中で、とくに印象深かったのは、九月一二日（第二日曜）、小河内神社に奉納された「鹿島踊り」（国指定重要無形民俗文化財）であった。小河内村が湖底に沈んだのは一九五七年（解村式はその六年前）、以来、この踊りは、離村して羽村に移り住んだ人たちが保存会を作って伝承してきたという。この日一一時頃か

る「たましん歴史・美術館」（多摩信用金庫が設立した財団が運営）の歴史資料室をしばしば利用させていただいた。ありがたかった。

そして、八月ごろからは、特定の市に次第に私の関心が集中するようになり、多摩のその他の市町村は視界から遠のいていった。その市とは青梅、府中、東村山である。そこで見たこと、聞いたことを素材の形で並べるだけでも、何か意味があるのではないか、と思うようになった。結果的に、ひいきの引き倒しのような観光案内になったが、どこの神社や公共施設に興味を持たれる方がいて、自分も行ってみようかと思ってくれたら、興味と関心の共有という、このエッセイの目的は達せられる。

一 青梅 信仰と芸術の山峡 やまかい

父の出身地である青梅は、地元の人がいいうように、イノシシが右方に走るような形をした東西南北に大きな町で

ら神社の鳥居前の広場で、女装した若い男性六人が、ゆつたりとした太鼓と笛の音をバックに典雅な舞いを披露してくれた。私が、演目「月は八幡」、「桜川」、など踊り手たちの婉美な所作に見ほれていると、傍で女性たちが踊る一人について、「あの人本当にきれいな」とささやきあっていた。昔も今もお祭りは恋の季節だった。

奥多摩湖は、忘れたい夕べも与えてくれた。七月下旬、奥多摩湖畔の民宿に泊まった日、午後四時ごろ妻の運転する車で到着すると、ご主人は「ここらは夜になると猿や猪が出てくることがありますよ」といった。夕暮れ時の湖は、空の青、湖の群青、山の緑が薄暗がりの中で混然となり、神秘的なまでに美しかった。「蓮魚」と思われる巨大な魚が、時折、湖面から跳ね上がった。宿の女将さんは、心のこもったおいしい山菜料理でもてなしてくれた。この夜、幸い猿も猪も出てこなかった。

この奥多摩湖と小河内村については、巨大な小河内ダムの周辺や、古刹・普門寺などを訪ねるとともに、文献も少し調べたが、これも書くまでに到底至らなかった。なお、『小河内村報告書』（一九三八年刊）など小河内ダム関連を含め、多摩に関する文献・資料については、国立市にあ

ある。この市の地形的な特色は、東部が主に台地、北部と南部は丘陵地、西部は山岳地帯をなし、市の中南部を多摩川が西から東に蛇行をくり返しながら貫流し、きわめて多彩な山河の光景に富むことである。

交通の幹線はJR青梅線。青梅市内だけでも停車駅は、東から河辺・東青梅・青梅・宮ノ平・日向和田・石神前ふたまたお・二俣尾いづくはた・軍畑さわい・沢井みたけ・御嶽と一〇もある。駅名だけでも歴史を感じる。今回はこの全ての駅で乗降した。利用者が少ないためか、駅員のいない駅もいくつかあった。

立川駅と奥多摩駅の間を走る青梅線は、青梅駅以西では、多摩川と青梅街道にほぼ沿って走っており、とりわけ電車が二俣尾の駅を過ぎて、軍畑・沢井・御嶽駅までの間はトンネルもなく、しかも電車は高台を多摩川に沿って弧を描くように走るので、その左側の車窓に展開する景色は素晴らしい。緑なす吉野丘陵を背景に、多摩川に架かる橋、茅葺屋根の家、教会の尖塔も見える。ごく短い時間だが、息を飲むような絶景にも出会える。

〇 名刹の里

青梅については私は情けないことに、この町が素晴らしい神社の所在地であることを全く知らなかった。中でも、青梅市の観光案内や各種ガイドブックで、青梅観光の二つの目玉のように紹介されている塩船観音寺と武蔵御嶽神社について、塩船観音寺は名前さえ聞いたことはなかったし、武蔵御嶽神社のある御岳山には、半世紀以上も前の中学生時代に、友人たちと一緒に登った記憶があるだけである。

塩船観音寺、宗派は真言宗醍醐派の別格本山。所在地は、青梅線の河辺駅から北に約二キロ、なだらかな霞丘陵の山麓にある。四月の中旬、バスと徒歩で初めて行った。所要時間は駅から三〇分ぐらいであった。そこは、格式ある諸堂と、鬱蒼とした樹林、時節ごとの花々が綾なす、評判にたがわぬ大寺であった（寺伝によると開創は六五〇年頃とされる）。

最初に私を迎えてくれたのは、屋根が茅葺で金剛力士像二体を安置する風格ある仁王門であった。次いで、カシの二本の大樹がその前に守護者のように立つ阿弥陀堂、本尊である十一面千手観音のおわす観音堂（これら三つは室町時代後期の建築物でともに国の重要文化財）、それに菓

師堂、鐘樓が、丘陵地の大きな船のような地形の底部に、林立するスギやアカマツの巨木に守られ、大地から生えだかのように揺ぎなく建っていた。多摩にも日本の中世をそのまま伝える古寺があった、というのが第一印象であった。

それら諸堂を通り過ぎると登りの坂道になり、関東でも指折りの花の名所「つつじ山」が目の前に広がる。その中腹には、児玉稻荷大明神と山王七社権現が祀られている。寛容で開放的な真言宗の寺院らしいと思う。山頂には、三月に完成したばかりの、青銅製で高さ一五メートルの塩船平和観音が南南東に向い、青梅市民を慈しみ見守るように立っている。その説明板には、この像は「二千有余名の浄財により」建立されたと書かれていた。その中に、青梅に住む私の従兄の名前もあった。

観音寺の年中行事の中心、例大祭の五月三日には、観音堂のご本尊・十一面千手観音が開扉（年に四回だけ）されるので、今度は妻の運転する車で出かけ一人で拝観した。鎌倉時代の作とされる、やや細身だが、まことに気品と威厳に満ちた観音さまであった。その左右の脇を、小ぶりでも躍動感のある木造の二十八部衆が固めていた。

この日は特別に観音堂の中で、お坊さんが家内安全祈願の護摩をたいて下さった。火は知恵の光であり、炎は世間の悪や病魔を焼くという。思いがけず空海の始めた真言密教世界の一端に触れることができた。ある高名な仏教者がいうように、「純粹な仏教は仏教史のどこにも存在しない。いつの時代にも民衆の信仰実体は靈験、奇瑞を抜き去っては存在しないものであり、その実体は泥臭い、どろどろしたものである」（宮坂宥勝『密教への誘い』）。

この寺のほか、根ヶ布の天寧寺（曹洞宗）、成木の安樂寺（真言宗）、黒沢の聞修院にも何度も足を運んだ。

天寧寺には六月、東青梅駅から歩いて訪れた。成木街道を北に向かい、途中で右手に行くと、寺に近づくにつれ鬱蒼たる山林が眼に入ってくる。右に曲がると、格式のある黒ずんだ惣門と六体地藏尊が迎えてくれる。ここまで二〇分ほどである。門をくぐると、左手に杉の並木が続き、右手の高い石垣の上にはお墓が見えた。

参道を百二、三〇メートル歩くと、江戸時代（一八世紀中葉）に造られた有名な山門が現れる。黒に近い濃茶の荘重な建物に、二階の扉の朱色と彫刻の緑が見事に映え、門の左右には色も鮮やかな守護神、多聞天と増長天が立つ。

それからも何度か見たが、いつも素晴らしいと思う。山門に次いで、中雀門、本堂、禅堂、庫裏、鐘樓、東司（便所）と、禅宗である曹洞宗の伝統的な七堂伽藍が整然と並んでいる。中でも鐘樓の銅鐘は一六世紀に造られたもので、国の重要美術品である。

これらの建物の大部分は江戸時代に建てられたもので、それらの経た長い歳月と、見事な伽藍配置が醸し出す深い精神性に導かれるように、その後も、真夏、晩秋、真冬と訪れた。いつも参拝者の姿は目立たず、私は「聖域」ともいいたい境内をゆっくりと散策した。だが今年七月一日日に訪れた時は、いつもと様子が違った。広い駐車場は満杯で、交通整理の人がそこかしこに立っていた。聞くと「施餓鬼」であった。私は、お寺での葬儀や年忌法要はともかく、「施餓鬼」会にこれまで立ち会ったことはなかった。

大きな本堂には壇信徒の人たちが一杯につめかけていた。数人の僧侶の姿も見えた。境内に立ち止まっていると、午前一一時頃、本堂から詠歌が流れ、参列者全員による「般若心経」の誦誦が聞こえてきた。「観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時……色即是空 空即是色……羯諦羯諦……

：般若心経」。私は一五分ほど境内に佇んだ後、お寺を辞した。後日、お寺の方に聞くと、この法会は、「自分が先祖だけではなく、万人によって生かされている、ということに感謝するためのものです」、ということであった。

あの「施餓鬼」会に集った檀家の方々が、戦後の長期にわたる大改修を含め、布施の心でこの名利を支えてこられた。これまでの私は、通りすがりの受益者でしかなかった。こうした反省とともに、今回、何人かの曹洞宗の和尚さんと話をする機会もあり、この宗派の寛容さ、奥の深さといったものをいっそう感じた。

一方、安楽寺は、青梅に住む妻の友人がぜひ行くようにと薦めてくれた。これも六月に、バスの便が一時間に一本程度と余りよくないので、妻の運転する車で市の最東北部、埼玉県との県境の成木地区にある同寺を訪ねた。青梅市の北部はそれほど高くはないが、丘陵また丘陵が東西に連なっていて、私たちの車は一旦青梅市から埼玉県飯能市に入り、再び青梅に戻るというコースを取った。

安楽寺では、最初に総門と軍茶利明王堂というお堂が迎えてくれた。それらの建物の古くも毅然として佇まいと、総門に侍する平安時代後期の作とされる、二体の独自

な風貌の仁王像、それにお堂の右手に屹立する二本のイチヨウの巨木と、左手の大スギが、この寺の由緒がただならぬものであることを示していた。軍茶利堂から左の方向に坂道を上っていくと、本堂の高い屋根とお寺を取り囲む白壁付きの板塀、際立って大きい一本のスギが眼に入る。この大スギこそ神霊の宿る木であろうと思った。茅葺の通用門（長屋門）をくぐり、本堂にお参りしてからスギの前に立った。

この大木の横に立つ東京都教育委員会の説明板には、木の幹周り六・五メートル、樹高三七メートル、とあった。周囲をぐるりと回って、あらためて自然の造形力の偉大さに打たれた。スギが立派であるように、先人の作った境内の本堂、鐘楼、宝塔、地藏堂、太子堂など諸堂も風格と威厳があった。とりわけ本堂は、一七世紀末（一六九三年）に建てられた書院風本堂で、都内に現存するこの様式の本堂で最も古い、と説明板に記されていた。

八月の中旬には、この安楽寺のお祭りで一年に一度開扉される、軍茶利堂の軍茶利明王を拝観した。お寺に着いたのは午前一一時頃、地域の人々がお祭りの準備の最中であつた。二、三〇人の拝観者が来ていた。堂内ではお寺の

方が明王の説明をしてくれた。制作は平安時代末期といわれ、腕が八本で三メートル近くの激しい憤怒の表情をした明王で、仏陀である宝生如来の使者（化身）とされる。この仏様を拝みながら、長い歳月、「成木の軍茶利さん」に向かい、「安穩」を祈り続けてきたであろう地元や近郷の人々を思った。

その後は一月中旬に行った。軍茶利明王堂前のイチヨウ、参道のドウダンツツジ、境内のモミジ、これらの晩秋の装いがいとも鮮やかであった。この日は本堂で法要があり、それが終わるのを待ってお願いして、ご本尊の不動明王を拝観させていただいた。広く立派な本堂内を案内してくれたお寺の方は、「うちは山寺です」と控えめにいわれた。

開修院（曹洞宗）は、青梅駅の北二キロほどの黒沢地区にある。一八五〇年に建立という茅葺の堂々たる本堂、清涼な池と小川、境内のよく手入れされた樹木、周囲の鬱蒼たる山林、これらが一体となって深い趣を醸し出しており、真夏と晩秋に訪ねた。

ここでは、「寺はいろいろな人々と何かの出会いの場、人と人との出会いの場、いろいろな思いの発信の場」でも

ありたいと、座禅会、ご詠歌の会、読経会、パソコン教室などのほか、「山寺コンサート」も定期的に開かれている。私はネットで、今年の六月一九日に有名な音楽家によって「フォルクローレ・コンサート」が開かれ、南米アンデスの音楽が演奏される、と知り同寺に電話で確かめると、「どうぞ、お越し下さい」ということで聴きに行った。

この日は、運転手である妻の都合がつかず、青梅駅からお寺までタクシーを利用した。料金は九一〇円。私が着いた時、本堂には大勢の人が開始を待っていた。演奏者はギターリスト・木下尊博、笛とパーカッションの菱本幸二の両氏。ご本尊の阿弥陀如来が見守る中、「雪のひとりごと」、「平和に生きる権利」、「コンドルは飛んでいく」など南米の人々の熱い思いを託した歌が本堂に響いた。その合間に、檀家の方々によるご詠歌の詠吟と、参加者全員による観音経の読誦があり、それに二人のギターと笛が鮮やかに和した。

木下さんは、原発事故の被災地、旧知である福島県飯館村を訪ねたことも話してくれた。ときどきウグイスの鳴き声も聞こえた。味わい深い二時間であつた。お寺は深い山林の中で、現代とともに生きていた。

○ 神々の山 御岳山

御岳山山頂（標高九二九メートル）に鎮座する武蔵御嶽神社。以下は、時系列で並べた同神社訪問のメモである。

八月一九日の昼ごろ、青梅線・御嶽駅前からバス、次いでケープルカーに六分乗って、終点の御岳山駅で降りた。駅の海抜は八三二メートル、そこからコンクリートで舗装され、所によっては、樹高三〇メートルものスギ並木に両側を挟まれた参道を、二〇分ほどで通り抜け神社の大鳥居前の広場に着いた。

そこからの上がりは三百二、三〇段の階段は、私にはかなりきつかった。しかし、参道の両脇には、神社の信者組織「講」によって建てられた参拝記念碑がびっしりと並んでいた。「参拝百七十年記念 横浜市神奈川区 〇〇講」、「永代参拝記念 所沢市 〇〇講」、「太々神楽奏上記念 東久留米市 〇〇講」などと書かれているのを眺めている間に、頂上の武蔵御嶽神社に着いた。

社殿の佇まいは荘厳そのものであった。由緒書きによると、この神社はすでに中世において「関東の修験の一大」と、武蔵御嶽神社の「太々神楽」（東京都無形民俗文化財）と、流鏝馬祭りには、先ず山頂の社殿で神事があり、その後、齋主たちが大鳥居前の広場に下ってきて、篝火の中で午後五時四五分頃から祭りは始まった。

馬こそ登場しないが、古式に則り騎手が白木の的を射とめ、的の代わりに木端が集まった人たちに撒かれた。その木端に焼き魚を載せて食べると、一年間の無病息災が約束されるといふ。私も二枚手に入れた。広場での祭りの時間は三〇分ほどだったが、この神社の長い歴史が凝集されているように思えた。最終の下りケープルカー（六時三〇分）になんとか間に合った。

泊まりの機会は直ぐにやってきた。一〇月九、一〇日の夜七時半から新神楽が同じ広場で奏上されると聞いたので、一〇日の宿泊のある山荘に予約した。あいにく両日とも雨の影響で、期待していたように篝火を炊いての屋外での上演ができず、山頂の社殿の隣の神楽殿での公開となった。しかし初心者には、屋外の寒さや風も気にしないでゆつくりと見られる神楽殿の方が、反ってよかったかも知れない。

神社の方であらかじめ用意してくれた説明書きによる

中心」として栄えていた。江戸時代初期には、南向きだった社殿が江戸城鎮護のために東向きに変えられたが、その工事の采配を振るったのは八王子の代官頭、家康の懐刀でもあった大久保長安だった。

社殿の脇の玉垣内には、二柱社、神明社、北野社、大口真神社など諸々の神も勧請されて祀られていた。宝物殿には、国宝の赤糸威大鎧など、この神社の由緒の並々ならぬことを物語る名品が多数納められている。この日は、運悪く薄曇で遠方への視界は遮られたが、清浄な空気を吸い静寂な時をゆつくり過ごした。

神社の大鳥居前の広場の下、それでも海抜八五〇メートル前後の場所に、御師（同神社の神主）の営む宿泊施設・宿坊が集中的にあった。こんなに高い山の上に、こんなにも多くの宿が、と思った（その数はネットで調べると二四）。宿坊の入り口には、「〇〇高校御一行様」、「〇〇様御宿」などと宿泊者の名前が書かれていた。とくに夏休み中は、学生の合宿や企業研修などでにぎわうようであった。私も一度は泊まってみたいと、その時思った。

次は九月二九日、神社の年間を通じても重要な祭りの一つ、「流鏝馬祭」に出かけた。お祭りは夕方なので、と、武蔵御嶽神社の「太々神楽」（東京都無形民俗文化財）は、信徒の人たちが神社に参拝する時の儀式のクライマックスといえるもので、一般の人たちには、こうした夜神楽という形で公開している、ということだった。神楽の舞われる前に、私たちを祓い清める儀式が行われた。

本格的な神楽を初めて見た。演目は、「浦安の舞」、「奉幣」、「三神和合」、「天孫降臨」、「山の神」の五座で、「奉幣」以降の演者と伴奏者は皆この神主さんたちで、長い伝統と日頃の厳しい修練によるのであるう、見ている息詰まるようなすばらしい舞いが繰り広げられた。少女二人の巫女舞もりりしく美しくかった。神楽について素人の言葉で語るのではなく、御嶽神社の文章を直接引用させていただく。

「神前に向かって能管、篠笛がメロディを吹き、太鼓と大拍子がリズムを刻んで楽が奏せられます。その楽の音ののって、ある時は荘重に、また軽快・勇壮に、舞い手ぶり、袖のかざし、そして足さばきもみごとに舞って、神と参詣の人々とを、楽しくもおおらかな感動に誘うのです」（御嶽神社文『御嶽神社の祭り』）。

約一時間半の神楽が終わると、今日の演者から参列者

にお餅が振舞われた。ラッキーなことに私には紅白の二つが飛んできた。この日の夜、神楽殿は一杯の人が集まった。二百人近くはいたであろうか。思いがけず外国の人も十人はいた。皆満足そうであった。私にとつても、日本の伝統芸能としては、これまで能・狂言くらいしか接してこなかったもので、第一級の神楽との出会いは本当に新鮮で幸運だった。

その夜は宿坊に泊まった。翌朝七時から「日供祭」という毎朝行う神事があるというので、六時半頃、また神社に登った。参道で子犬を連れたい可愛らしいお嬢さんと出会った。私が「昨日、巫女舞をされましたね」というと「はい」と答え、「練習大変でしょう」と聞くと、「ええ」といって坂道を足早に下りていった。彼女は、御岳山に住む神主さんの小学校六年の娘さんであった。

この朝は、好天と澄んだ空気ということもあり、社殿の前に設置された望遠鏡で横浜のベイブリッジ、ランドマークタワーもよく見えた。御師集落に、養蚕をやっていた「越し屋根」の宿坊が一軒あったことや、参拝記念碑に横浜市の講が多かったこともあり、あらためて近代における「生糸」を介しての多摩と横浜の絆の強さを思った。思い

の後、ケーブルカーの山頂駅前の広場・御岳平で一〇時前から行われた日の出祭の祭典に、登山客を含め大勢の人々とともに参列し、次いで、神輿を中心に錦御旗、斎主・神職、鎧武者、供奉者、稚児など祭りの行列が神社に向かうのを見送った。

この朝、全く思いがけず、羽村に住む父方の従兄と出会った。前日から、お祭りのために御嶽講の仲間と山に来ていて、昨夜は、馴染みの宿坊に泊まったという。彼によると、毎年日の出祭の時には山に登っており、日曜日と重なった今年は参列者や見物の人が例年よりずっと多い、ということだった。従兄とは、彼が行列の後について行ったので別れ、私はその足で青梅市の東部にある塩船観音寺に行った。この日、ありがたいことに、全山を覆うツツジは最高の見ごろで、来訪の人たちの賛嘆の声がくり返し聞こえた。

この原稿を締め切る前にもう一度、夜神楽を見たくなくなったので、七月二四日、御岳山に登った。青梅の市街地を回った後山に登り、午後三時過ぎに武蔵御嶽神社に参拝した。その後、前回と同じ宿坊で荷物を解きくつろいでいると、偶々新潟から来たという人に出会い、御岳溪谷にある玉堂

がけず、この山から東に七、八〇キロ離れた東京湾は、朝の太陽の光をここまでギリギリと反射させていた。これも忘れたい光景であった。

一月二十八日には、今年最後の一般公開の夜神楽があり、音楽と踊りに人並み以上に興味と鑑賞眼をもつ妻と一緒に拝見した。夜の八時から、「奉幣」「千箭（返し矢）」「稲荷（種かし）」の三座が奏上され、とくに「稲荷」では狐とひよつとこのコミックな所作に、見ている皆が沸きに沸き、私は時を忘れた。妻も大満足であった。

この日の参列者は前回より多くはなかったが、洗練された若い女性が目立った。そのうちの一人について妻は、帰りの車の中で、「近頃見たこともないほど素敵なお人」といったので、私は、その清楚な美貌とやさしい微笑を思い浮かべ、あの人は神楽好きの「天女」かな、と茶化した。家に戻ったのは日付の変わる少し前、一一時半を過ぎていた。

今年に入って御岳山には中々行く機会がなく、ようやく五月八日、この神社の最も規模の大きいお祭り「日の出祭」があるので、思い切って早朝に山に登った。朝八時過ぎには神社に着き、私の家族と親族の多幸を祈念した。そ

美術館のことなど話が弾み、私の方から夜神楽を勧めた。

宿の美味しい夕食を済ませ、八時十五分前には神楽殿に昇った。新潟の人も奥さん、娘さんと一緒に来ておられた。神楽の始まる少し前に、御岳山に合宿で来て宿坊に泊まっているという小学六年生、一人ほどが先生に引率されて来た。この夜は、「奉幣」、「天の岩戸」、「山の神」の三座が奏上された。

この夜のメインの大曲、身を隠した天照大神を神々が呼び戻すという「天の岩戸」の奏上中、子供たちの様子をみると皆真剣に見入っていた。セリフが全くなくとも、太鼓、大拍子、能管、篠笛という四つの楽器が奏でる迫力ある多彩な響きと、演者たちのダイナミックな動きと艶美な舞いで、子供たちはストーリーを感じ楽しんでいたのであろう。もちろん、私もそうであった。

ジャンルを問わず舞台芸術（表現）というものは、プロの高度の演技によって年齢や言葉の壁を簡単に超えることがある。私も中学生の頃、叔母（母の妹で日赤の看護婦）に連れられて行った水道橋能楽堂で、彼女の謡曲の師であった田中幾之助のような宝生流の名人たちの舞台上に、理解はとて及ばなくても、ひきつけられたことがあった。

この日の子供たちも、今年の「真夏の神楽の夜」を決して忘れないだろう。ジャンルにこだわることなく、少年少女にハイレベルの舞台を見せるのは大人たちの責務だと思ふ。

翌朝、七時からの日供祭に参列するために、また神社に行った。新潟の人のほか、初めてというカップルもいた。私たちはともにお祓いをうけ、祝詞奏上のりとに続いて玉串を奉奠ほうてんした。神事後、神主さんが短い時間ながら、裏話も含めて御嶽神社が三二の神職の家で支えられていることを話してくれた。山頂の神社から心身とも充足して宿坊に戻った私には、心のこもった朝食が用意されていた。

○ 芸術の河辺 御岳溪谷

青梅市を流れる多摩川、とりわけ御岳溪谷は、大小無数の岩石が水量豊かな多摩川に抗してつくる変幻自在な流れと、兩岸の樹木の四季折々の装いが織りなす溪谷美で、日本国内でも広く知られる。ちなみに、『日本経済新聞』「何でもランキング・散策したい新緑の溪谷」(二〇一〇年五月二二日)では日本第九位にランクされた。

(一九六一年開館)が、横にすらりと広がる白い塀と高い石垣に囲まれ、イチョウとヤマザクラの巨木を石垣の左右に配し優雅な姿を見せている。設計は、有名な建築家で文化勲章受章者・吉田五十八である。玉堂は愛知県出身、上京して橋本雅邦に師事し、若くして画家としての名声を確立した。一九四四年に御岳に疎開、亡くなるまでこの地に住んだ。

この美術館は今年で開館五〇周年を迎え、新たに展示室を増設するとともに記念の特別展を四月から開いている。今年の六、七月には、玉堂の次男で陶芸家の修二と玉堂の親子展であった。付言すると、渋谷区広尾の山種美術館では今年六、七月に、「美しき日本の原風景―川合玉堂・奥田元宋・東山魁夷」展が開かれていた。私も出かけてみて、構えや気取りのない玉堂作品が、相変わらず高い評価と人気を得ていることを確かめた。

次に沢井駅で降りて(楓橋)を渡ってしばらく行くと、「櫛かんざし美術館」に着く。この間約一〇分。この美術館には、江戸時代から現代までにわたる「小さな装身具の中に表わされた日本文化の粋」が、巧みに展示・解説されている。また、(楓橋)の傍らには、銘酒「澤乃井」で

この溪谷美に加えて、御岳溪谷とその周辺には大変なアトラクションがある。それは、御嶽駅から宮ノ平駅までの間の駅で下車して、そこから一〇分前後歩くだけで多摩川沿いにある美術館、記念館、由緒ある寺社を訪れ、都心と違い清浄な空気の中で、充実した時を過ごすことができる。

まず御嶽駅の周辺には、二つの充実した美術館がある。

御嶽駅前の(御岳橋)のすぐ手前を下り、上流に向けて右岸を二五分近く歩いたところにある「たましん御岳美術館」。ここには、荻原守衛、中原悌二郎、高村光太郎、浅井忠、中村彝、熊谷守一、岸田劉生、荻須高德、藤田嗣治、岡鹿之助、須田国太郎、香月泰男、倉田三郎らによる彫刻と洋画の名作が展示されている(年二回の展示替えで見られない作家もある)。この美術館のスポンサー、現在の多摩を代表する金融機関・多摩信用金庫の実力と見識を物語るようである。この美術館に行くと場所柄から、いつもリュックを背負ったハイキング姿の人がいた。

一方、(御岳橋)を渡って左方に五分ほど歩いた多摩川の南岸には、近代日本画の巨匠・川合玉堂かわいぎょくどう(一八七三―一九五七年)の作品や遺品などを展示する「玉堂美術館」

知られる小澤酒造(創業は一七〇二年)の酒蔵・庭園・食事処もあり、いつも来訪者でにぎわっている。ここでは有料だが利き酒もできる。最高級酒「梵ぼん」は、三百年の酒造りの歴史が作りえたものである。

二俣尾駅からなら(奥多摩橋)、石神前駅なら人道橋の(好文橋)を渡って、いずれも一五分ほど歩けば、国民的な作家にちなむ「吉川英治記念館」が迎えてくれる。吉川英治は第二次大戦末期(一九四四年)にこの地(当時吉野村)に疎開してきて、一九五三年に品川に移り住むまで、ここに滞在した。広く様々な樹木で美しく調えられた「草思そうし」庭園の中に、母屋・書斎、記念館がほどよく配置されている。母屋にはかつての養蚕農家の特徴である「越し屋根」が三つある。

展示されている英治作品の初版本、自筆原稿、書画・書簡、写真などの豊富な資料は、文豪の辛苦の足跡をよく偲ばせる。大長編「新・平家物語」(一九五〇年開始)の連載されていた古い『週刊朝日』を見た時、大変な読書家であった私の母が、この物語を毎週楽しみにしていたことを思い出した。この記念館の設計者は、私もかつて行った木曾馬籠の藤村記念堂、盛岡の原敬記念館も手がけた谷口

吉郎である。期せずして、御岳溪谷沿いには二人の大建築家の作品が遺されている。

この記念館の直ぐ裏手には愛宕神社があつた。今年の五月の末、百段ほどの急な石段を登ってみると、風雪によく耐えてきたという感じの実に立派な遥拝所の拝殿があつた（本社は愛宕山の山頂）。お参りした後、振り返った。そこには、見晴らす青梅丘陵とそのふもとの人家の細長い帯と、多摩川に沿った樹木のうねるような緑の連なり、その手前の柚木から梅郷地区には立ち並ぶ無数の人家、があつた。時々、青梅線の四両編成の電車が太線のように横に走り、右手にあるアーチ型の〈好文橋〉が景色を引き締めている。今回の多摩巡りの中でも、忘れがたい眺望の一つであつた。

次は吉野梅郷。日向和田駅から〈神代橋〉を渡って一分、およそ二〇〇品種・二万五千本のウメが、多摩川南岸の丘陵地に春の訪れを告げ、それに引き寄せられて毎年三〇万人もの見学者が来るという。二月に行つたときは、時期も早く雨模様だつたので途中で引き返してしまつた。

今年三月一日に行つた。薄曇りだつたこの日、とりわけ梅郷の中心「青梅市梅の公園」は、起伏に富んだ山の

斜面が、赤・白・ピンク・黄、一二〇品種・一五〇〇本といわれるウメで覆われていた。その至上なまでの美しさ。これは自然と人間が共同で創作した「芸術」作品といつていい。吉野梅郷は「日本一」という評価もあるほどだ（『日本経済新聞』「何でもランキング・おすすめの名所」二〇〇九年二月一四日参照）。この日の帰り、妻の運転する車の中で、東北地方を襲つた空前の大津波のことを知つた。岩手県陸前高田に住む、妻の三人の姉の家族も被災した。

日向和田駅から一駅の宮ノ平駅で降り、それから南西に、下り坂になつている青梅街道を歩いて三分ほどのところには、旧和田村の村社で立派な社殿の「和田乃神社」、五分ほどのところに、シダレウメと茅葺の山門で知られる「明白院」（曹洞宗）がある。そこから青梅街道を少し下り、左に折れて五分ほどで、多摩川に架かる〈和田橋〉に着く。その先は吉野街道につながる。

私は、ここまでに〈御岳橋〉から始めて、多摩川に架かる青梅の上流の主な橋の名前を挙げてきたが、どの橋からその上流・下流を眺めても景色は一樣に素晴らしい。安楽寺を教えてくれた妻の青梅の友人は、中でも〈和田橋〉

からの眺望が最高といつていた。私は、念のため今年の五月下旬、もう一度宮ノ平駅から歩いて行つてみた。たまたま（幾重にもかさなり合う）青梅・奥多摩の山々、上流からS字形を描いて悠揚と流れる河、河岸を深い緑で囲う豊かな樹林、点景のように映える人家。私も彼女の意見に同意した。

○ 青梅宿 多摩人の財産

青梅市の交通の基点・青梅駅。その南側の旧青梅街道（江戸・甲府間）沿いには、江戸時代から「青梅宿」と呼ばれてきた市街地がある。

ここには八月、御岳山の帰りに立ち寄つた。正直いって、少し活気のない商店街だと思つたが、西の方向（駅からは右手）に一五分ほど歩くと森下町で、そこには江戸時代の青梅で有数の商家「旧稲葉家住宅」（ここはかつて土蔵造りの店舗Ⅱ店蔵であつた）と、店の両側に土蔵のある現役のお店「柳屋」（米穀・茶商、明治初期の建築と推定）があつた。これは大変な歴史的な資産だと思ひ、その後、青梅宿には何度か足を運んだ。

この青梅宿の東西の境といつていい地域（西の森下町と天ヶ瀬町、東の住江町と西分町）には、江戸時代の青梅人の篤い信仰と当時のすぐれた建築文化、宿場のほか材木・石灰・織物などの取引で栄えた青梅宿の往時をよく伝える、格式のある寺社と立派な商家が揃つていた。ちなみに、店蔵は木造の店舗より一〇倍ほど建築費がかかるという。

まず、西の森下町には、今いった旧稲葉家住宅と柳屋のほか、店蔵を改造した岡崎酒店と瀧島家住宅（元織物問屋）もある。街道から坂をやや下つた天ヶ瀬町。そこには真言宗の名刹・金剛寺がある。この寺は、気品と風格をあわせもつ本堂（一八八四年に建立）、一七世紀前半期に建てられた形のすぐれた山門（表門）、平安時代の風雲児・平将門の伝説にちなむ「将門誓いの梅」などで、よく知られている。

一方、東（駅から左手）の住江町には旧青梅村の総鎮守・住吉神社が八十数段の石段の上に端然と座している。それぞれ、一八、一九世紀の前半期に建てられた本殿と拝殿は、建築の技術、彫刻ともに見事である。神社の前の街道を渡つて下手には、由緒ある延命寺と宗建寺（ともに臨済宗建長寺派）もある。また住江町の東隣の西分町には、

一九世紀中葉に建てられた悠揚とした構えの本堂をもつ名刹・宗徳寺があり、それに隣接して、百余段の石段の上に西分神社が鎮座している。

西分町にはさらに、一八七〇年前後に開業という店蔵の釣具店「三好屋」、一八八〇年に創業の旅館「橋本屋」、その三年後に店を開いた和菓子の「中枡屋」が現役で営業しているほか、江戸時代後期から明治にかけて青梅一、二の豪商といわれた、風格ある店蔵の山崎邸（元質商）もある。しかし、道を挟んで「中枡屋」の丁度真向かいにあった「万徳旅館」（幕末から一九九三年まで営業、一九九八年に解体）は移築・復元され、この九月から小金井公園内の「江戸東京たてももの園」で公開が始まる。青梅ファンとしては複雑な気持ちである。

それはともかく、これら東西の町の間には、上町・仲町・本町があり通して一キロ余りの街道沿いには、新旧様々な商店、個性的な建物が並んでいる。

建物の姿こそ昔のままではないが、江戸時代から営業しているという食品卸商「油屋」、^{あぶらや}「ホテイヤ傘店」、和菓子子の「道味」、金物の「大野金物店」、本の「駒屋書店」のような飛び切りの老舗や、薬・陶器・呉服・人形・履物・

雲代議士も八王子にまでやってきて、選挙運動をしていたからである。

「昭和の名建築」といわれる津雲邸は、現在は年数回公開されるのだが、この建物・庭園の整備と、常時公開を求める市民運動が四年前（二〇〇七年）から展開されている。一月下旬にはここで、往年の名歌手にちなむ「昭和の歌姫 追憶・越路吹雪展」が開かれた。この展覧会には関係者の努力によるのだろう、芸能生活から私生活までにわたる彼女の縁の品々が非常によく揃っていた。その引力の故か、私が行った日、かつての「こーちゃん（彼女の愛称）ファンらしい女性たちが次々に訪れていた。建物の公開もさることながら、歩いてみると青梅宿は意外と長い市街地なので、散策の途中に、この庭園を鑑賞しながら一休みできればと思う。

総じていうと、青梅宿のように、江戸時代から現代までの店舗・ビル、由緒ある寺社が混在している街道筋は、多摩のどこを探してもない。もちろん、多くの地方都市と同様に近年、市の郊外に相次いだ大型ショッピング・センターの出現によるのであろう、閉鎖した店舗（^{しちゆうたぐや}仕舞屋）や、マンションになった所もそこかしこに見られる。

レコードなど、レトロな味わいの専門店が並んでいる。創業が明治・大正という店はいくつもある。これらに、大小の現代的な店舗、銀行・信用金庫、青梅市民会館、青梅商工会議所などが加わる。

飲食店では、お蕎麦の「大正庵」、とんかつの「もりたや」、和食の「^{すずきや}寿々喜家」が、いずれも百年前後の営業の歴史を持つ。実際に立ち寄ってみて、これら飲食店の建物の佇まいと、出された料理の上等な味は、青梅宿が近代以降も繁華街として栄えていたことをよく物語る、と思った。近年では、住江町に「青梅赤塚不二夫会館」、「昭和レトロ商品博物館」、「昭和幻燈館」の三館が開設され、そのユニークで充実した展示により、「レトロ」に憧れる若者の気持ちを掴んでいる。

最近注目されているのが、住吉神社の向かいで大通りから四〇メートルほど坂を下ったところにある「津雲邸」である。ここは、かつて多摩選出の津雲國利元衆議院議員の邸宅で、私は、この戦前から活躍していた保守系有力政治家の名前を、子供の頃からよく聞いていた。何故なら、戦後も長い間（一九七四年まで）、多摩全体が衆議院議員選挙では東京都第七区として一つで、青梅を地盤とする津

私の生まれ育った八王子市には、江戸時代に甲州街道の代表的な宿場町があったが、第二次大戦最末期の空襲、その前は八王子大火（一八九七年）と、近代になって二度も、「八王子宿」というべき旧市街地を焼き払われた。ここには今、柳屋も油屋も大正庵もない。名刹・禅東院、大義寺も、名社・子安神社も焼かれ戦後の再建である。青梅宿は多摩の住民にとって、「多摩信仰たてももの街」、とも呼べるような貴重な財産である、と思う。

そこで、不可能を承知の上で、足腰の弱くなった観光客としての願いを添えたい。

青梅宿の南には、立派な施設・建物がさらに三つある。その一つ、近現代の日本を代表する、洋画家・小島善太郎と陶芸家・藤本能道の作品を常設展示する「青梅市立美術館」は、青梅駅から四百メートルほどの距離だからまだいい。

しかし、多摩川の南岸の釜の淵公園内にある「青梅市郷土博物館」と、江戸時代に造られた農家「旧宮崎家住宅」（市北部の成木地区から移築。国の重要文化財）へは、駅から片道でおよそ一キロ、しかもかなり長い坂道を往復しなければならず、私のような高齢者には相当きつい。もっ

と駅に近いところに移すことなどできないか。もう一つ、郷土博物館が保管する、縄文時代後期の土器の名品「注口土器・小型深鉢形土器」（国の重要文化財）の常時展示も希望する。

なお、この「青梅宿」の項は、地元商店連合会編『ぶらり青梅宿 第3編』、青梅市教育委員会編『青梅市の町屋』、青梅市史編さん委員会編『青梅市史』などを参照した。

ともかく青梅は、数世紀にわたる人間の真摯な営みを静かに伝える寺院・神社・商店・民家・記念館・美術館から、連なる山々と湾曲を繰り返す多摩川のつくりだす山峡の絶景、日本一とも評される梅郷までもつ、多摩随一の観光地である。

○ 歌人・高田浪吉

ところで、青梅について「山峡」という言葉を使ったのは、ある人の歌にちなんでいる。

青梅に関する調べごとでJR河辺駅前にある青梅市中央図書館（二〇〇八年開館）に一〇月に行った時、偶々、

職という家業に携わりながら短歌を独学で学んだ。その後一九歳で、アララギ派の大歌人・島木赤彦に認められ師事する。彼を世に送り出した歌は、彼自身が遭遇した一九二三年の関東大震災にちなむものだった。『川波』の中から二首。

母うへよ 火なかにありて 病める娘を
いたはりかねて ともに死にけむ
人ごゑも 絶えはてにけり 家焼くる
炎のなかに 日は沈みつつ

今回の東日本を襲った大津波は、どういう短歌や詩、文学・思想作品、さらには再建の国家的な展望をもたらすであろうか。ここでも日本人は試されている。

浪吉は、戦後都内に戻ることなく、青梅に居を定め、作歌に精進するとともに後進の指導に当たった。一九六二年九月に六四歳で亡くなったが、その二年後、歌集『生存』が世に出た。その序歌として、島木赤彦夫人であるとともに、自身もすぐれた歌人であった久保田不二子は、「高田

その書架にあった神田重幸『アララギ派歌人 高田浪吉』という本を手にして、第二次大戦末に戦災を逃れて青梅に疎開してきた芸術家の一人に、高田浪吉（一八九八〜一九六二年）という歌人がいたことを知った。情けないことに初めて聞く名前であった。

この本に触発され、浪吉の『川波』（一九二九年刊）に始まり『高田浪吉歌集 木苺以後』（一九六八年）で終わる八冊の歌集を集めて読んだ。彼の歌碑が、青梅駅から北に歩いて一五分ほどの永山公園の一角にあると聞いたので、一二月に行った。それは、浪吉が亡くなって一年後の一九六三年に、彼に作歌指導を受けた人たちによって建てられたもので、高さ九〇センチ、横三〇センチほどの石碑に、ゆったりと流れるように刻まれていたのは次の歌だった。山峡Ⅱやまかい（ひ）Ⅱ山と山とに挟まれた谷間（広辞苑）、である。

たゝなづく 山見よ姿 しづまりて
町はうるほふ 青梅やまかひ 浪吉

高田浪吉は一八九八年に東京の本所に生まれ、下駄塗

波吉様を思ふ歌」を六首寄せた。そのうちの一首。

朝露に しろき芙蓉の 花ひらき
清らかなりし 人思はしむ

私は浪吉については、その歌集と自伝『わが歌の遍歴』などを急いで読んだだけの印象だが、彼に捧げるに「清らかなりし人」以上のものがあるとは思えない。また、最後の歌集『高田浪吉歌集 木苺以後』では、大歌人・土屋文明が序文を寄せ、あの斎藤茂吉がいかに浪吉を高く評価していたかのエピソードを語っている。

この機会に浪吉の歌をもう一首だけ。後で触れる府中出身の詩人・村野四郎は短歌にも通暁し、『秀歌鑑賞十二ヶ月』（一九六七年刊）という名著を書いたが、その中で取り上げられていたものである。晩秋、青梅の街中に出かけた浪吉の感慨である。四郎は波吉より四歳年下、ほぼ同世代といっている。

富有柿 一つ食ぶれば いささかの
のぞみの足りぬ 秋ふけし街

これについての四郎のコメント。
「これという用事もないのに、何となく出てきた街中。どこにも、いかにも晩秋らしい黄いろい薄陽がさしていた。知り合いの家に寄り、そこで見事な富有柿を一つご馳走になったが、ただそれだけが、今日の唯一の充実のような気がして、なぜかわけもなく怪しかった」。

二 府中 理想の現代都市へ

最初に述べたように、多摩の市町村の大部分が、地域学習と紹介の拠点として郷土資料館、ないしそれと類似施設を設立・運営している。私が訪ねた二四の郷土資料館の中で、率直に言って、その展示内容の質と量において一番印象が深かった、もっと端的に言えば「ナンバーワン」は「府中市郷土の森博物館」であった。初めて行ったのは二月下旬、以降、その充実した施設・展示・イベントに魅せ

られ、すっかりリピーターになってしまった。
最寄り駅は京王線・分倍河原で、駅から歩いて二〇分、バスで六分ほどである。徒歩でそこへ行く場合の二つのルート、「下河原緑道」と「かえで通り」も途中に公園やベンチ・トイレがあるなど、よく整備されている。

○ ベストの「公共」施設

一九八七年四月、市の南部、多摩川に臨む低地部にオープンした「府中市郷土の森博物館」は、総合的な歴史・自然施設で、中には博物館本館と、府中の市の木・ケヤキと市の花・ウメを中心とする樹木ゾーン、ロウバイ・アジサイ・ハギなど四季折々の花々で彩られた庭園、子供たちが世話をする稲作水田、様々な手芸・工芸教室が開かれる「ふるさと体験館」、野外ステージ、晩秋には周囲のモミジの紅葉が見事だった人口滝と池、府中出身の江戸時代の名大官・川崎平右衛門の像もある。

さらに旧府中町役場、旧府中尋常高等小学校、府中の稲作と畑作地帯に典型的な二つの農家、甲州街道沿いにあった大店の田中家、水車小屋など、古い建物一〇棟も見活に深く定着している稲荷信仰について、全国にわたって調査・資料収集をした大変な労作で、市レベルの博物館でよくここまでと感嘆した。

紅葉の季節、一月の平日に行った時は、府中市内ばかりではなく、南隣りの多摩市と、真北の方角にある東村山市の小学生の団体が見学に来ていた。園内を巡回していた係りの人に聞くと、ここには近隣の市だけではなく都内や埼玉県からも、子供たちが授業の一環として来るということだった。二〇一〇年の最後は二月二三日、プラネタリウムを会場としたコンサート「星と音楽の夕べ」があり、ソプラノ独唱とギターの演奏を楽しんだ。

今年になってからは、二月の「郷土の森梅まつり」に行った。「白加賀」「豊後」「唐梅」など六〇種、一一〇〇本という梅林を、なだらかなスロープを辿りながらゆっくりと堪能できた。後で知ったが、博物館では梅まつりの俳句を募集しており、その優秀作品一五句のうち九句の作者は八王子、清瀬市など市外の人であった。

今年五月には、特別展「アウトローたちの江戸時代」を見に行った。無法者・無宿者・浪人・虚無僧など江戸時代の厄介者に府中の人々がどう対応してきたか、詳しく教

事に復元・展示されている。とりわけ有難かったのは、旧府中尋常高等小学校に、府中出身の詩人・村野四郎のコーナー（「村野四郎記念館」）があったことで、ここでは、彼の、府中の甲州街道沿いの商家での生い立ちから晩年までが、『体操詩集』など彼の詩集の初版本、写真、雑誌記事、自筆原稿、ラジオ放送での談話、などで分かりやすく展示・紹介されていた。村野四郎のことは後で触れる。

博物館本館の常設展示ルームに入ると、まず府中市の最大のシンボル・大國魂神社の「くらやみ祭」が、大きなマルチ・ビデオ画面、神輿・大太鼓・万灯など実際に使われていた祭りの道具、関係者のビデオ・インタビューなどで詳しく語られる。次いで石器・縄文・古墳時代から、古代に武蔵国の国府のあった時代、中世における鎌倉幕府と関東北部をつなぐ軍事・交通の要衝としての役割、江戸時代の宿場町としての繁栄、明治以降の北多摩郡の中心地としての発展などが巧みに紹介されている。

このほか、国内で最大級のプラネタリウムもあるし、特別展・企画展、郷土史・自然観察の講座、お話会も常時行われている。中でも五月〜六月に開かれた特別展「お稲荷さんの世界」（担当・佐藤智敬学芸員）は、日本人の生

えてもらった。そこから「町の精神」ということを思いついた。後で書くが、別に検証もあるわけではなく、一つの感想と書いていただきたい。

この郷土の森博物館のほかに、府中には非常に充実している公共施設が、さらに三つあった。「府中の森公園」の南隣りにある「府中の森芸術劇場」、公園の北端にある「府中市美術館」、京王線・府中駅から北東に歩いて七分ほどのところにある「府中市立中央図書館」である。それぞれについて簡単に触れる。

府中の森芸術劇場は、東府中駅から北に歩いて約七分、その間の立派なイチョウとクロマツの並木も、いかにも「緑の街」府中らしい。劇場は、いわば現代の寺社のようなもので、そこに到着するまでの「参道」も大事だと思う。この府中の森芸術劇場は、大改修工事が終わり九月に再オープンした。ここには特色ある三つのホール、定員二〇七人の「ドリーむホール」、パイプオルガンを備えた「ウィーンホール」、伝統芸能にも適した「ふるさとホール」があり、どんなジャンルの文化・芸術も上演できるという。

この劇場のオーブンは一九九一年六月、当時は息子をつれ何回か家族三人で行ったことがある。忘れられないの

「夏の思い出」などで知られる作曲家にちなむ「中田喜直没後一〇年」の記念コンサートに行く予定にして切符も買っていたが、東北を襲った巨大津波の我が家への余波で行けなかった。五月下旬には、「ウィーンホール」でアマチュアの弦楽アンサンブルを聴いた。その真剣な演奏に打たれた。六月一日には、「ふるさとホール」でおなじみの落語家・桂米丸さんの独演会を楽しんだ。どうやら、この劇場は私のような府中市民でない人が多いようだ。ネットで見たが、今年のあるクラシック・コンサートのアンケートによると、六割の入場者が府中市以外から来たという。府中市美術館（二〇〇〇年一〇月開館）には、遅ればせながら八月に初めて入った。

夏休みの子供向け企画として「みてみよう」という、考え抜かれた美術イベントが繰り広げられており、大勢の子供たちが本当に生き生きと課題に取り組んでいた。こんなにも眼を輝かせている少年・少女を見たのは何年ぶりか、と思った。常設展も収蔵している現代洋画の巨匠・牛島憲之の作品を軸に充実していた。この美術館図書も、ミュージアム・ショップもよかった。

九月〜十一月には、開館一〇周年記念の企画展「バル

は、その年の一二月、映画音楽「ゴジラ」の作曲家としても知られる伊福部昭の音楽会（「交響ファンタジー」「ゴジラ&キングギドラ」など演奏、指揮・石井真木）であった。あの時は幕間で、客席にいた伊福部さんに握手を求めて行列が急にできた。当時一二歳の息子も並んだが、出遅れたため彼の前で握手は打ち止めとなり、悔しそうな顔で戻ってきたものだった。その少年も、いつしかアマチュアオケのチェロ・パートのトップになった。最近ネットで見たら音楽会の映像記録が出ており、本人の指揮や、弟子・黛敏郎の太鼓出演もあった。懐かしかった。

思い出話はこれだけにして、一月二三日、一九年ぶりに、大ホール「ドリーむホール」でのコンサート（ドボルザーク「新世界より」ほか、指揮・飯森範親氏）に出かけた。エントランス前の多様な樹木に囲まれたスペース豊かな広場、ゆったりとして開演の時を待てる中央エントランスホール、厄介な階段や長いエスカレーターもなく、すと客席に辿り着けるホール内、それらは私の知る限り、東京都内のどの著名ホールにもないものだった。この日の交響曲とフルート協奏曲の演奏も素晴らしかった。

今年の三月一三日には、「ふるさとホール」での、歌曲

ビゾンからの贈りもの」があった。これは、フランスのフオンテーヌブローの森と、日本の武蔵野などを題材にした風景画を結びつけようとする意欲的な展示で、私の行ったのは一〇月末の平日だが、大勢の見学者でにぎわっていた。フオンテーヌブローの森には、その前年の秋に偶々行っていたので、いっそう親しみやすかった。絵画の知識のない私にとって有難かったのは、音声ガイドで主な二〇作品の解説が聞けたことであつた。

クールベ、ミレー、フォンタネージらの作品のほか、近代日本風景画の傑作といわれる和田英作の「渡頭の夕暮」、児島善三郎「田植」も見ることができた。約一二〇点の展示作品の収集と解説に捧げたであろう、学芸員の方々のエネルギーと熱意に感謝した。

ここではまた、現代アーティストによる「公開制作」というユニークな試みも行われていた。今年二月に見た、利部志穂さんの「返る 見る―彼は、川を渡り、仕事へ向かう―」は印象的だった。同館の話だと、全国の美術館の中で専用の公開制作室があるのは府中だけで、開館以来これまでに五〇人以上のアーティストが参加し、現在では年三回開催しているという。しかも公開制作のドキュメントが毎回

作られており、一冊五〇円で入手できる。加えてそれは、日本語・英語のバイリンガル版である。この美術館は若い才能に十分なチャンスを提供している。この市ならではのキャパシティーである。

今年の夏休み企画「ぱれたんと遊ぼう！ 絵の国のなつやすみ」も、前年と同様によく工夫されており、来ている大勢の親子連れが楽しそうだった。ここでは理想の公共美術館をめざす、意欲的で根気のあるトライアルが行われている、とあらためて思った。

三つ目は府中市立中央図書館。

府中に関する調べごとで八月に、この図書館に初めて行った。府中駅から同館までは歩いて七分ぐらい、その道筋のほぼ三分の二はサクラ並木が続いているので、夏の強い日差しやわか雨を気にしないで済む。蔵書の数は八〇万冊。膨大な書籍をゆつたりとしたスペースの中で、ほどよい高さの書棚から選ぶことができる。図書館スタッフの対応も機敏だし、集中的な調べごとをするための「研究個室」も、持参の軽食も取れる「休憩コーナー」も用意されている。

しかも三年前から、多摩のほかの市との図書館相互

利用制度が始り、八王子市民の私もこの図書館の本を借りることができる。おかげで府中関連の本を何冊も借りることができた。実は後で触れる『東村山市史』もここで貸してもらった。図書館で閲覧だけの図書か、貸し出しも可能か、で利用者にとっての利便性は桁違いに違う。

これだけでも素晴らしいのに、この図書館には、私がいままで国立・都立・市立のどこの図書館では見たことのない特別な書棚があった。それは、四階の入り口の右手にある「外国語資料コーナー」である。そこには、英語・中国語・朝鮮語のほか、ベトナム語・インドネシア語・タイ語・ヒンディ語・タガログ語・ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロシア語など一六言語、約八千冊という外国語文献がびっしりと並べられていた。

特に、英語・中国語・朝鮮語については、哲学・歴史・科学・技術・文学・芸術・生活全般・日本文学など、大変幅広い分野の本が集められていた。英語の書籍数はおよそ四千冊、中国と朝鮮語はともに約千五百冊あるという。朝鮮語は分からないが、中国語コーナーに立った時、神保町の中国書専門店・内山書店の書棚を見ているような感じになった。

この多数の外国書は二〇〇七年、中央図書館のリニューアルオープンに際し、市民の外国や外国語の学習に役立つだけではなく、世界各国から府中に来る人々にもぜひ利用してほしいと、収集したということだった。日本のどこに、このように世界を広く見据えた公立図書館があるうか。

私には、「外国語資料コーナー」をもつ府中市立中央図書館は、市の東部にある外国語の教育と研究の名門・東京外国語大学とともに、府中の「国際化」の二つのシンボルのように思えた。同大学は、二〇〇〇年に北区西ヶ原から府中市に移転・開校した。場所は西武多摩川線の多磨駅から歩いて三分、緑豊かな理想的な教育環境にある。専攻される外国語は実に二六。大学は、そのグラウンドデザインに、「地球社会化時代における教育・研究の世界的な拠点大学を目指す」を掲げている。学生数は約四千人、外国人留学生はおよそ六百人（同大学公表データによる）。

今年の七月二三日に、同大学の「オープンキャンパス」があったので出かけた。この日、その文字を生まれて初めて見た、ラオス語専攻の女子学生と話した。あらためて、この大学は、全世界とコミュニケーションできる日本で最高の組織の一つだ、と思った。帰ってからネットで調べたら、

府中市はすでに二〇〇六年九月に、この大学と「協働・連携に関する相互友好協定」を結んでいた。ちなみに、この時の学長はフィリピン史・東南アジア史の権威の池端雪浦氏で、大岡昇平が『レイテ戦記』を書いた時の助言者の一人でもあった。

四つの理想的といっている公共施設。どうして府中がこれだけの施設を整備できたのか、気になってきた。

○ 緑の街

すぐれた公共施設だけではなく、府中は、いくつもの大公園や中・小の公園、緑道、街路樹が至るところに整備されている「緑の街」であった。

大公園は、すでに触れた府中市郷土の森博物館のほか、府中の森公園、多磨霊園、浅間山公園、府中公園、武蔵野公園、武蔵台公園、武蔵野の森公園、小柳公園がある。それぞれに特色があるが、一番よく行ったのは「府中の森公園」で、ヒマラヤスギ、スタジイ、ケヤキの巨木や、立派なサクラ並木があるばかりではなく、その南北に卓越した芸術ホールと美術館を擁しており、ここでは自然と二つの

芸術を半日かけてゆっくり堪能できる。この三つの施設は今、理想的な「公共空間」を形作っている、と私は思う。

「大」公園といえる場所は他にもある。古代から府中の中心・大国魂神社の大鳥居の前から、桜通りに至る約六百メートルの「けやき並木通り」は、最新のデパートとレストラン、専門店街「フォーリス」、家族向けの飲食店、府中特産品直売所、金融機関、武蔵府中郵便局などと一体になって、他の町では考えられないユニークな大公園、現代版の「門前町」をなしている。最近では、「国史跡・武蔵国府跡」、「ふるさと府中歴史館」が神社境内の隣に整備された。

ともかく約一五〇本というケヤキの大木は、同じ落葉樹のイヌシデなどと一緒になって、春から夏には高い緑のさわやかなトンネルを作ってくれるし、秋は黄葉で美しく、冬は落葉して暖かい日差しを通してくれる。ありがたいことに旧甲州街道の手前、「フォーリス」前の歩道には、ベンチがいくつも並べられており、府中に行くときと大体締めくくりで大国魂神社にお参りし、その後、ここで一休みした。大国魂神社では今年四月、荘重な随神門が落成した。ここほどいつも参詣人の多い神社を、多摩に関する限り私は知

らない。

またJRA東京競馬場も、その芝の美しい広大な本馬場と、少し離れて南から見ると巨大空母のような観客席「フジユースタンド」ばかりではなく、立派なケヤキ並木、充実した競馬博物館、様々な遊具施設、数多のレストラン・ファーストフード店も揃っており、特に、この競馬場や地方競馬場でレースがある日には、大人たちにとってはもとより、親と一緒に来た子供たちにとってもドリームランドとなっている。

とはいえ、府中ならではの「大公園」となると、やはり一九二三年に日本で最初にできた公園墓地・多磨霊園である。ここには一六年前の一九九五年に、没後五〇年（一九四五年八月九日長野刑務所で死去、本誌第五号参照）にちなんで哲学者・戸坂潤のお墓に行つて以来だが、六月と八月に出かけた。西武多磨川線の多磨駅から西に歩いて五分ほど。

霊園の管理事務所で「多磨霊園案内図」をもらい、キリスト者・内村鑑三、歌人・与謝野晶子、政治学者・吉野作造、外交官で教育者・新渡戸稲造、二・二六事件で正気であるがゆえに殺された国家指導者、高橋是清（当時蔵相）

・斎藤実（同内大臣）・渡辺錠太郎（同陸軍教育総監）、ゾルゲ事件のリヒアルト・ゾルゲと尾崎秀実、民族的叙事詩ともいべき『レイテ戦記』の作家・大岡昇平らのお墓に赴き、日本近・現代史に大きな足跡を残した人々を偲んだ。お墓は、先祖代々の墓はともかく、生前の本人の意思を反映、ないし遺族が故人の気持ちを忖度、しているためだろうか、亡き人の人柄というか、その思いといったものを映し出しているようにも見えた。

二・二六事件の三人の犠牲者の墓は、彼らの人柄を反映してか、いずれも毅然たる佇まいを見せていた。第二次大戦中、ゾルゲ事件で刑死した尾崎秀実のお墓は簡素で、細身の墓石には「尾崎秀実英子之墓」と書かれていた。英子は彼の妻で、私より一回り上の世代の人にとっては、彼の英子と娘・楊子宛の書簡集『愛情はふる星のごとく』で懐かしい名前であろう。ゾルゲのお墓には、ロシア語で「ソ連邦英雄 リヒアルト・ゾルゲ」と記されていた。ゾルゲの略歴、彼の同志名を記した石碑もあった。勇士ゾルゲが「生命を捧げた」国家はすでに地上にない。歴史の非情、及ばぬ人智というべきか。

中でも、その作品と人柄をずっと尊敬してきた大岡昇

平のお墓は印象的であった。それは余り目立たない場所に、周囲をツツジで囲まれ、サルズベリ・ツバキ・コウヤマキが、「大岡家之墓」と彫られた、薄いピンクの万成石と思われる墓石を守るかのように立っていた。これは、彼の名作『武蔵野夫人』で、自殺を決意した主人公の道子が訪れた、「ひっそりした裏通りに小さな土地」ではあるが、サルズベリ・ツバキ・モクセイなど「樹は狭い地面にひしめきあつて」といるという「宮地家之墓」にやや似通っているように思えた。

こうした大公園ばかりではなく、中小の公園は、分倍河原、西府、中河原、白糸台、競艇場前、是政のような鉄道の駅の近辺や、歩いていても、市内循環バス「ちゅうバス」の車窓から見ても、市内の至るところにあった。このほか、細長い緑の公園ともいえる「緑道」も、郷土の森博物館に行く道筋でもある「下河原緑道」などいくつもあった。街路樹も、「けやき並木通り」、「桜通り」、「かえで通り」、「すずかけ通り」、イチヨウ並木の「平和通り」とよく整備されていた。特に真夏に他の市や町を歩いていると、緑の街・府中がいかに素晴らしいか痛感した。

さらに立派と思つたのは、この市と市民が現状に安ん

じていないことである。緑の理想都市を目指し、二〇〇九年からの一〇年間を目標とする「府中市緑の基本計画二〇〇九」を策定し、市当局・市民・市内の事業者が一体となってさらなる充実を図っている。この計画書を図書館で借りて自宅で読みながら、府中の人々にあらためて敬意を表した。

○ 「柔軟な包容力」

以上のべた公共施設や公園・緑道・街路樹のほかに、私がこの市にひかれるものがある。

府中市内を歩いているとよく分かるのだが、JR南武線、京王線などの駅前に設置されている地域案内地図や、街角やメインストリートの至るところに立つ方向・距離標識も、他の多摩の市町村、東京都心部に比べて格段に親切である。

「府中市郷土の森博物館 1.3 km」、「ルミエール府中（市民会館・中央図書館） 470 m」、「東府中駅 700 m」、「府中市美術館 1.1 km」、「府中の森芸術劇場 900 m」、「武蔵野公園 1.2 km」、などという

模の大きさだけは分かる。

これら三つの巨大施設は、一九二〇年代から一九三〇年代に開設された。府中が選ばれたのには、都心部に充ちな土地が得られなかった、府中は交通の便がよくなった（一九一六年、府中・新宿間の鉄道が全線開通）、などの条件も確かにあったであろうが、同時に、これらを受け入れた府中人には、そのキャパシティー＝包容力があつたと思えてならない。

それは歴史的に作られたものではないか、というのが、市内をくり返し歩き、郷土の森博物館の特別展を見ている間に浮かんだ思い付きである。

府中は、多摩川を南に見晴らす六〇七メートルの高さの府中崖線（ハケ）の上に位置し、古代の東山道武蔵道や、後には鎌倉街道、相州・川越道の通る、関東の南北交通の要衝（多摩川中流域で渡河と河川交易の適地）として、武蔵国の国府と、国魂を祀る信仰の中心・武蔵総社むさしそうじや六所宮ろくしやう（現・大国魂神社）が置かれ、近郷近在ばかりではなく、多摩郡を含めて二一郡（行政単位）もあつた広大な武蔵国や、関東一円からも仕事や参詣で大勢の人々が訪れた。

とりわけ、江戸時代に整備された五街道の一つ、江戸

具合に方向と距離が表示されていると、私のような外来者には、「ようこそ府中へ」、という歓迎のメッセージと思えてくる。

わずか六年前の二〇〇五年に「国史跡」に指定された「武蔵府中熊野神社古墳」（日本最大の「上 円下方墳」）に行った時だ。JR南武線の西府駅で改札口を出たら、「国史跡 飛鳥時代の古墳が現代に蘇る 武蔵府中熊野神社古墳 当駅北口から600m」という大きな看板が、乗車券売り場の上に掲出されていた。しかも、その古墳に到着するまでに、ポイント、ポイントで案内板が出ていたし、歩道にも数か所、「上円下方墳」と刻まれた石が敷かれていた。これでは迷いようがない。どうして、この町はこれほど来訪者に親切なのだろう。

府中の特色はまだあつた。府中には、多摩というより、日本のどの町にもないユニークな場所が三つある。すでに触れた日本最大の公営の霊園・多磨霊園、日本最高の設備を誇るJRA東京競馬場と、日本最大の府中刑務所（収容する受刑者約三千人）である。このうち、前二者には数度行っているが、刑務所の内部は見学していない。しかしJR武蔵野線の北府中駅で降りて、その周囲を歩いたので規

と甲府・信州を結ぶ東西の道・甲州街道の宿場町となり、それまでの南北からの来訪者に加え、大都市・江戸や甲府・信州などからも旅人、六所宮への参詣客がやってきた。彼らを迎える府中宿には幕末に旅籠屋が二九軒、家数は四三〇軒もあつたという。六所宮の例大祭「くらやみ祭」に老若男女が集う大変な賑わいぶりは、斎藤月岑げいせんの名著『江戸名所図会』がよく伝えている。

二五〇年以上も続いた江戸時代、府中にやってくる旅人には、武士・商人・職人・芸能民・僧侶・修験者・巡礼者のような常連のほか、物見遊山や寺社詣でのために往来する町民・農民のグループもいた。府中にはこうした御馴染みのほか、旅人に慰安を供した「飯盛女めしもりおんな」と呼ばれた遊女がいたし、歓迎されざる、ゴマのハイ、ごろつき、博徒、無宿者といった「アウトロー」もしばしば出現した。

旅籠屋・茶屋・商店などを営む宿場の住民は、身元の確かな旅人を快く迎える一方、必要に応じて応援の人馬を負担する周辺農村「助郷すけごう」の人々と一緒になって、幕末に向け治安がいつそう悪くなる中で、「府中宿組合」という自衛組織を作り、危険人物や厄介者を処する術をさらに身につけたであろう。それは、それまでのお上や上級機関

に対する善処の請願、取りあえずの解決のためのお金の供出に加えて、囚人対応費用の分担や、仮牢「かいらい圈」の設置であったりした(府中市郷土の森博物館ブックレット①『甲州街道 府中宿』(担当・馬場治子学芸員)、同④『アウトルーたちの江戸時代』(同・花木知子学芸員) 参照)。

要するに、古代からの南北と東西交通の要衝で名社の「門前町」、さらに江戸時代の「宿場町」、という歴史的な体験は、府中とその界隈の人々、府中人に、お客を変わらず温かく迎えつつも、貴賤上下、人間にもいろいろある、「賭け事に眼のないものもある」、「力を合わせれば無法者も怖くない」、などという「柔軟な包容力」を育んだ、と思えてならない。しかも、この包容力の伝統は、近代になって、産業化・都市化の進む中で複雑・多様になっていく、社会や人々の要求(最初は異様に見えることもあろう)に大胆に対応する「先見性」としても、引き継がれたのではないか。

この包容力と先見性により、府中人は、戦前には、日本でも先例のない広大な公園墓地(一九一三年開設)、競馬場(一九三三年同)、刑務所(一九三五年同)、という他の市や町の住民なら拒否するような施設の設置を、府中な

らではのハケの上・下の土地の特色をうまく利用して受け入れた。その結果、こうした施設建設のため町の人口も急に増えた(『府中市史中巻』参照)。戦後はさらに、多摩川競艇場の設置(一九五四年)、平和島競艇の開催(一九五五年)に踏み切り、高度経済成長期を迎えては、サントリ―武蔵野ビール工場(一九六三年)、日本電気(一九六四年)、などの有力企業を積極的に誘致してきた。

その後の、大病院・都立府中病院の開設(一九七〇年、現・多摩総合医療センター)、下河原緑道の完成(一九八二年)、KDDIなど高度情報事業体が集まる「府中インテリジェントパーク」の開発(一九九二年)、府中市郷土の森博物館(一九八七年)・府中の森芸術劇場(一九九一年)・府中市美術館(二〇〇〇年)の開館、東京外国語大学の開校(二〇〇〇年)、中央図書館と市民会館の複合施設「ルミエール府中」の開館(二〇〇七年)、JR南武線・西府駅の開業(二〇〇九年)は、米軍府中基地・関東村住宅地区の返還、日本製鋼所の閉鎖などの外的な要件もさることながら、公共的なものを何よりも優先する、その「柔軟な包容力」の延長線上にあるだろう(府中市発行の写真集『あの日府中』参照)。

そして、それらの大規模施設・企業・収益事業によってもたらされる安定した財源と、大國魂神社、多磨霊園、東京競馬場、多摩川競艇場、多摩総合医療センター、府中市郷土の森博物館、府中の森芸術劇場など、そこを目指して市内・市外からコンスタントに集まる大勢の来訪者と、そこで働き生活の資を得る多数の府中市民の存在が、誰もが利用できる公共施設や公園などの格段の充実・整備、分かりやすくきめ細やかな交通案内・標識にもつながってきたのではないか。

実は、五月に初めて行った「くらやみ祭」で、三日、露店がびっしり並び、参拝客で溢れかえる大國魂神社の境内で私の感じた「居心地のよさ」、五日、クライマックスの神輿渡御かみこぎの渦中で余所者の私が抱いた「一体感」、それらは府中人の「柔軟な包容力」に由来したのだろう、と今思う。

ここまで書いてきて、府中にもう一つあってほしい施設を思い出した。

二年前(二〇〇九年)の秋、私たち家族三人は一週間パリに旅した。その間、一番頼りにしたのはミシュランの英語のパリ・ガイドブックであった。それが三ツ星に指定

していた凱旋門・ノートルダム大聖堂など市内の名所や、フォンテーヌブローの森、モン・サン・ミシエルも訪れた。残していたというより、余り期待していなかった、パリの北東部のラ・ヴィレット公園にある三ツ星の「科学・技術シティ」には帰る前の日まで行かなかった。そこは偶々泊まっていたホテルの直ぐ裏手にあり、前日の午前中暇ができたので軽い気持ちで行った。

そこは本当にすごい科学・技術展示施設だった。その宇宙の歴史、病気、人間の成長過程など一部のコーナーを三時間ほど体験しただけだが、そのハイレベルな内容と分かりやすい展示・解説は、さすがに科学技術の大國・フランスならではのもの、と思った。これに類した施設を日本でも早急に作らないと、この国の未来はない、と私たち三人の意見は一致した。

後で知ったが、この施設の素晴らしさは日本でも博物館関係者にとっては周知だそうである。それならば、府中に日本版「科学・技術シティ」ができないか。「三・一一」の国民的体験から、エネルギーと自然災害に重点を置くというやり方もある。解説は日本語のほか、できれば三か国語、英語・中国語・朝鮮語でやってほしい。この市はずで

に約四千人の市在住の外国人を対象に、広報紙「府中インフォライン」をこれら四つの言語で発行している。また、ビルマやエジプトから見学者が来たら、同じ市内にある東京外大の学生さんに案内をお願いすることもできよう。

○ 府中人・村野四郎

ところで、府中に行つて、そこに関わつた歴史上の人物や、現代の著名人の名前を何人も聞いた。江戸時代の名代官・川崎平右衛門、幕末の思想的指導者で六所宮の神主・猿渡盛章さわたりもりあきら、近現代では、府中と関わりがあった著名人として、詩人・村野四郎、ハス研究者・大賀一郎、民俗学者・宮本常一、洋画家・牛島憲之、精神科医・斎藤茂太、現在活躍中の作家・井出孫六氏らである。

これらの人々のうち、私は以前から井出孫六氏を尊敬しその著作を読んできたが、今回、府中市郷土の森博物館での紹介をきっかけに、府中生まれの村野四郎に初めてひかれた。知るにつれて、私には、彼が典型的な「府中人」と思えてきたからである。彼の生涯と詩歴については、『定本村野四郎全詩集』の年譜、『府中市郷土の森博物館ブツ

クレット3 詩人村野四郎』（担当・馬場治子学芸員）、ご子息・村野晃一氏の『飢えた孔雀 父、村野四郎』ほかを参考にさせていただいた。

村野四郎（一九〇一年～一九七五年）は、旧多磨村上染谷（現・府中市白糸台、大國魂神社から約二キロ東方）の富裕な酒問屋の四男として生まれ、東京府立第二中学校（現都立立川高校）を経て慶応大学に学ぶ。学生時代から俳句と詩をつくり、二五歳で第一詩集『罌』を出す。一九三九年の『体操詩集』で広く注目され、戦後は、『実在の岸辺』、『抽象の城』などで第一人者としての地位を確立、一九五九年の『亡羊記』で現代詩の一頂点に立った、といわれる。四郎が「わたしの最も尊敬している先輩詩人の一人」といった金子光晴は、四郎について分かりやすく「日本で一番の詩人」と評した（『回想の詩人たち』参照）。

よく知られるように、彼の作品には府中界限（彼のいう「武蔵野の西郊」）を素材としたものが少なくない。一月に、彼の白糸台の生家を確かめ、ハケ（府中崖線）の道や旧甲州街道を辿り、瀧神社、中央高速道路や、遠く丹沢山塊などを眺めて、そのことを実感した。ただ、それまで四郎の代表作「鹿」について、どこの鹿であるか考えた

ことはなかった。しかし、彼の生家から南に五分ほど歩き、「九中通り」に架かる陸橋の上（ハケの上）に着いた時、左方はビルや住宅で遮られて見えないが、右方に多摩川の対岸に連なる多摩丘陵が見えた。その時私はとっさに、四郎の「鹿」は多摩丘陵に現れたのではないか、と思った。

もしかすると四郎は、府中の農家の人たちがかつて「ムコウヤマ」と呼んで枯れ枝や落ち葉を川を渡つて採りに行つたという、多摩丘陵にもかつて鹿が生息していたという事実（『多摩市史叢書（8）多摩市の自然』参照）から、人間に追われ銃で殺される鹿を連想したのではないか。鹿が見ていた「村」の方とは、府中のことだろう。鹿とは、戦後、住宅地やゴルフ場などの開発で破壊され尽くした、多摩丘陵そのものであったかも知れない。ただし四郎自身は何処の鹿かいつてはいないし、高名な批評家も場所については触れない（『現代詩のこころ』参照）。

多摩丘陵の鹿などという、私の思い付きはこれくらいにして、彼が並みの詩人と違つたのは、詩作に専念するだけではなく、彼は同時にビジネスマンとしての生涯をも貫いたことである（一九二九年に理化学興業入社から一九六六年の理研電解工業会長辞任までの三七年間）。彼は、「経

済的な防波堤の中でゆつくり純粋に、金のことを考えないで詩を書いていこう」と決意した、「二足わらじの人生」でよかった、とラジオ番組でも語っていた。四郎は精神的なキャパシティが人並みはずれて大きな人だった。

しかも、四郎は現代詩の世界の名伯楽はくらくであった。彼は戦後一貫して、『詩学』のような詩の専門誌や、一般紙・誌の投稿詩の選者を積極的に勤め、新人の詩壇への登場の導き手、現代詩への最良の案内者となつてきた。村野がその才能に注目した詩人として、「青春喪失」世代の大詩人・金井直の名前はよく知られている。また、茨木のり子が第一詩集『対話』（一九五五年）を出版した時は、『詩学』の広告に、金子光晴と一緒に推薦文を書いた。四郎がこの処女詩集に感じたのは、「一つのかがやく手」であった。

金井自身が書いている。「……もう、かれこれ二十年近く前になる。その頃、ぼくの知っている若い詩人たちのほとんどが村野四郎の批評をうけていた。村野四郎の柔軟な思考から出てくる透視力は、当時の、若い詩人たちの信頼をいっしんにあつめていた観があった」。この文章が書かれたのは一九六八年である（「村野四郎・人と作品」『日本詩人全集 27』所収）。もう一人、四郎がその詩を認め

励ました詩人に、四国のハンセン病療養所で生活する塔和子さんがいた。このことは最後に書きたい。私は、こういう四郎に「柔軟な包容力」の人、典型的な府中人を見る。実は、「柔軟な」は金井章のこの文章から借用した。

四郎は、ようやく一九六六年ビジネス界を退き、詩作に専念する。死の前に病床の四郎を見舞った金井は後に書いている。「だが、すでに時おそしの感があつた。やはり死期を早めた原因の一つに、二足のわらじをはいたための過労もあつたのではないだろうか」『日本の詩・一六 草野心平・村野四郎集』解説より）。彼が深く心を寄せた友・草野心平による四郎追悼の文章と詩がある（『現代詩手帖』一九七五年四月号）。その一部を引用したい。

文章は「それが生きてる時の最後だった」、全二六行の後半の六行。心平の独特の「」の使い方。四郎が亡くなった日は三月二日。葬儀は七日、葬儀委員長・草野心平。

「……懐中時計をズボンのポケットからそつと出し。見ると上野発の時間が迫つてゐた。私はそのことは彼に話さず。又来るよ。と言ふと。ウンありがとうと彼は言つた。どうも手を求めることも具合悪く。自分は毛布の上から彼

四郎の詩を一つだけ引用しておきたい。

『亡羊記』の一編「暗い雨のなかで」は、一九五四年三月のビキニにおけるアメリカの水爆実験に伴う放射能雨を素材としている（『詩学』同年八月号に発表）。現在の私たちが語られているようである。四郎は、人類の運命の先を読み取ることのできる大詩人であつた。「海のむこう」とはビキニ環礁、「熱い物理学の雨」は放射能雨のことである。「この国の女」とは「日本人」のことだろうと、当時のことを覚えていて私は思う。弥撒は「ミサ」。

分解された人間が / ここまでたどつた旅路の果
に / やつぱり待つていた / この黒い死の弥
撒 / 海のむこうから流れてくる / 熱い物理
学の雨の歌だ / この国の女は 立て膝をつい
て / くらい廂の下から / アヤメの花をなが
めている / はてしなく濡れるその紫のあたり
／ ひととき ぼんやり / 顔もなければ 名
前もない / ふしぎに艶めく幻影を見るのだ

の足をつかんだ。言はば手と脚との握手だった。病室を出た途端に私は涙がふきでた。ぐらぐらつとよろめいた。

一九七五・三・四

詩は「火葬」。心平のような親友をもてたことも、四郎の人間的な偉大さを証明する。

寝棺はガラン洞の矩形のなかに迂りこみ。／鉄の扉がガチャンと閉つた。／すると轟轟不気味な音がおこりだんだんそれは高まつてくる。／嗚呼。燃える。／頭の毛が背中が燃える。腰が脚が足が。顔が燃える。：（略）： 脳漿に巢喰つてゐたポエジイもクリティシズムも燃えてゐる。愛も憎しみも実存も。ハイデッガーもリルケも一緒に燃えてゐる。村野四郎の全体が燃えてる。燃えてる。／轟轟轟轟。：（略）：／最後に。／坊さんと私は四本の箸で一つの骨を拾ひ。／容器に入れた。

一九七五・三・六

三 東村山 歴史に選ばれた土地

三月中旬、東村山の郷土資料館「東村山ふるさと歴史館」を訪ねるためにJR国分寺駅の改札を出て、西武国分寺線に乗り換え、三つ目の東村山駅で降りた。この駅も今回が初めてだった。この市には、東部に「多磨全生園」、中西部に「正福寺地藏堂」、という多摩のどこにもない、この国の歴史が深く刻み込まれた場所があつた。

付け加えておくと、この市も青梅、府中と同様に鉄道の駅が多かつた。JR武蔵野線、西武国分寺線・新宿線・池袋線・多摩湖線・西武園線の計六路線、全部で九駅。しかし乗り換えがとも分かりにくく、駅のホームに立っていると、誰かが時折り駅員さんに尋ねていた。

○ 百年 多磨全生園

世間知らずの私は、この郷土資料館の展示で初めて、東村山の東部にハンセン病の「国立療養所多磨全生園」（以下「全生園」と略す）があり、それに隣接して「国立ハンセン病資料館」があることを知った。そこで、翌週、西武池袋線の清瀬駅からバスに乗り、国立ハンセン病資料館を訪ね、帰りに全生園を東から西へ歩いて通り抜けた。そして、園の正門近くからバスでJR新秋津駅に行き、そこで武蔵野線に乗り、西国分寺駅から中央線で家に戻った。今回の多磨めぐりの中で、最も重い一日だった。

資料館の入り口の横に、その昔、不治の病からの救いを求めて四国の霊場を遍歴する母娘の像が立っていて、強心をひかれた。あの松本清張原作の名作映画「砂の器」の親子の姿を思い出したからである。ハンセン病に関する展示は、不治の業病とされてきた同病に対する人類や、日本での対応の歴史が跡付けられている。とりわけ一九〇九年に全国に公的療養所を設置するという形で始まった、日本のハンセン病患者に対する強制隔離政策が、いかに非人間的・非合理的であったかが、数多の写真・文献資料と、雑居部屋の復元模型・当時の生活用具、患者の証言によって詳しく紹介されていた。

こうした展示の中でも、療養所内で女性と生活を共にするため断種手術をさせられた男性患者のビデオ証言には、初めて聞いたことなので胸が塞がった。こうした療養所は、全国に今、青森から沖縄の宮古島まで一五か所（その内国立が一三・私立二）あり、いずれも離島や人里離れた山間地に置かれていた。入所者は年々減ってきており、二〇一〇年末で二三四六人（全生園には二七四人）、平均年齢八一・三歳である。

このように社会から隔離された療養所に、あたかも囚人のように閉じ込められて生活する人々に、信仰による救いと並んで、陶芸・絵画・彫刻・手芸・囲碁将棋・創作などの趣味・表現活動は、大きな喜びと慰めを与えたという。こうした作品が所狭しと並んでいる。不自由な身体でよくここまで、と思う作品ばかりだった。

そうした中でも、社会との言葉による積極的な交流を目指す文学活動は盛んで、展示コーナーでは、その代表者として小説家・北條民雄^{ほつじょうたみお}、歌人・明石海人^{あかしかいじん}、俳人・村越化石^{むらこしかせき}さん、詩人・塔和子^{とうかずこ}さんの四人の仕事が大きく紹介されていた。恥ずかしいことに私は、北條民雄という名前をかすかに聞いたかな、と思っただけで、あとの三人

は全く初めて聞く名前であった。

資料館を一巡した後、ミュージアム・ショップ（売店）で、直ぐに目に付いた北條民雄の『いのちの初夜』、塔昭子さんの詩選集『希望よ あなたに』を買い求めた。その後、資料館の脇から全生園の園内に入った。最初に眼に入っただのは、ここで亡くなり、遺骨を引き取る家族・親族もなかった人々の納骨堂である。その正面には「俱會一処」と刻まれていた。「くえいっしよ、すなわち「多くの人々とともに一処に集まり会うこと」（『広辞苑』）、という意味である。手を静かに合わせた。

その近くに三月に建てられたばかりの「人権の森」の石碑があり、次の文章が刻まれていた。宣言は東村山市、建立は多磨全生園入所者自治会であった。

「いのちとこころの人権の森宣言」

かつてハンセン病は、不治の伝染病とされ、患者は国の強制隔離政策と人々の偏見や差別の中で、長く苦しい歴史を歩んできた。

ここ多磨全生園には、故郷を捨てさせられた人々が眠る納骨堂、終生隔離のなかで故郷を偲んだ望郷の丘、苦難の歴史を語り継ぐハンセン病資料館、これらとともに多くの

想いがある。

この地を第二の故郷とした人々は、萎えた手足に力を込め、病をおして拓いた土地に、一人一人が想いを込め、一本一本植樹し緑を育てた。

いま、その緑の地は、そこに暮らす人々と東村山市民との百年の交流をとおし、いのちとこころの人権の学びの場となった。

私たち東村山市民は、こころをひとつにし、ここに眠る人々を鎮魂し、この土地と緑と歴史のすべてを『人権の森』として守り、国民共有の財産として未来に受け継ぐことを宣言する。

平成二十二年九月二八日

東京都 東村山市

「

この宣言と石碑には、歴史の教訓を真摯に学び、遺産を未来に継承していこうとする、地域の人々と全生園の入所者の皆さんの気高い意思がある、と思いつつメモを取った。

この日は、西側の正門に向かう一部しか見学できなかったので、日をあらためてゆっくり全体を歩いて見たいと思った。家に帰ってからハンセン病資料館のカタログや、東村山ふるさと歴史館の企画展カタログ「全生園の一〇〇

年と東村山市」を読んだ。特に後者では、全生園の一〇〇年の歴史には、開設前には反対する地元民との間でトラブルもあったが、その後は現在に至るまで、地元住民との交流の努力が地道に続けられてきた、と記されていた。

次に全生園に行ったのは七月初旬。事前に、多磨全生園患者自治会編『俱会一処 患者が綴る全生園の七十年』（一九七九年刊）を読んでいた。全生園の中を歴史的に紹介する「全生園の隠れた史跡めぐり」を片手に歩いた。入所者がここから故郷を偲んだという「望郷の丘」に登った。園の南側にはキリスト教の教会、仏教の会堂もあり、宗教が入所者の大きな支えであったことを実感した。

北側にある野球場（民雄もかつて選手として活躍したという）では、東村山市の少年野球のチームが試合をやっており、家族が応援に来ていた。テニスコートも市民でにぎわっていた。その横には小路を挟んで、患者たちが基礎工事に参加して二年かけ、一九三四年に作り上げた「永代神社」があり参拝した。歩いていると、通りがかりの入所者の方が向こうから「こんにちは」、「道わかりますか」などと声をかけてくれた。

三五万平方メートルという広大な園を回って何よりも、かつたか、日本人には元々独創性とか、徹底的に考え抜くという資質が欠けているからではないか。巨大戦艦「大和」は造れても、プロミンの「プ」もできなかった。

原爆はいわずもがなだが、ハンセン病治療という点でも、日本はアメリカに完全に負けた。いうまでもなく、ハンセン病と同じように多くの人の運命を変えた「結核」、その特效薬・ストレプトマイシンも第二次大戦中にアメリカの学者が発見したものであった。それが発見できるような徹底した熟慮の国であれば、対米開戦という選択はなかったらう。

その後、同資料館図書室の蔵書で知ったのだが、ハンセン病をテーマとする小説「黒い影」（一九四九年発表）の中で、作者の阿部知二は、瀬戸内の療養所に敗戦の翌年、ハンセン病の教え子を訪ねた大学教師に、「この何十年かの内に、日本が駆逐艦を一つつくって無駄に沈める金を、この病気のために使っていたとすれば、この千人、いや全国の一万余千人の苦しみを、無いものにする事ができたということだね」、といわせていた。調べたら、戦前の駆逐艦一隻のおよその建造費は分かったが、当時の国のハンセン病対策費がつかめなかった。ともかく、阿部知二の

その樹木の本数と種類の多さに驚いた。ケヤキ、アカマツ、サクラ、カシ、カエデ、ウメ、タラヨウ、ヒノキ、ツツジ、ハナミズキ、メタセコイア、イチヨウなどで、その多くが、戦後、この入所者自治会が先頭に立って植樹してきたものだという。中央通りを歩いていると、ツバキとサザンカには名札が付けられていた。これは、一九八〇年代に行われた「一人一木運動」でカンパを出した入所者の名前であった（柴田隆行『多磨全生園・ふるさと』の森参照）。

ハンセン病資料館に再び入った。今回は、前回は知らずに過ごしてしまった、ハンセン病治療薬・プロミンのアンブル一〇本を見た。一九四三年にアメリカで劇的な治療効果が証明されたこの薬が、戦後、日本でも一九四七年に治験が行われ、二年後から本格的に使われ始めた。そして、恐ろしい不治の業病として、患者たちにもたした諦念・絶望、社会に与えた偏見・差別という二つの壁を、最初にかも強烈に打ち破った。

アンブルを見てあらためて思った。戦前・戦後の日本政府と医学界は、たとえ強制隔離政策を続けたとしても、何故、抜本的な治療薬（法）の研究・開発に努めなかったのか、ハンセン病のためにもつと国費を投入すべきではなような原則的な批判は大切だと思う。

全生園に半世紀近く勤めた元園長・林芳信の『回顧五十年』（一九七九年刊）によると、ここには皇室関係者・医療関係者・宗教家・政治家・行政官・文化人・芸能人など多くの人が視察と慰問に訪れていた。その中の一人、一九三六年にここで「マダムバタフライ」などを歌い入所者に多大な感銘を与えたという世界的なソプラノ歌手・三浦環は、その芳名録に、「いたましき病にかかりし人々と、ともに我はいのるよ声のかぎり、あわれみ給へさづけ給へや医療の一大発見を」（傍点筆者）と記していたという。環の豊かな人間性と、事の本質をとらえる天才の直感のすごさに打たれた。

一月六日には、ハンセン病資料館の秋季企画展「全生病院」を歩く―写された二〇世紀前半の療養所―の一環として、ハンセン病回復者の平沢保治さんと同館の学芸員が、実際に園内を歩きながら解説する「フィールドワーク」があり、それに参加した。なお、「全生病院」は一九四一年に国に移管され、「多磨全生園」となった。

まず訪ねた納骨堂について平沢さんは、ここには現在四〇八五柱が納められ毎朝ここに来る人もいる、「全生園

の聖地です」とおっしゃった。かつての病院時代の建物は殆どが失われているが、二人はここに、患者を懲戒のため収監した「監房」、患者が入所する時の「収容門」（公称・通用門）、歌舞伎の公演が人気を集めた「全生劇場」、などがあつたと、それぞれの場所に案内し、それにまつわるエピソードを話してくれた。また、「患者地区」（病院施設と患者の居住する地区）と、病院の外部および職員地区はかつて「土塁・空堀」で隔てられていたが、竹林の中にくわずかに残るその跡を見せてくれた。参加者は八〇人近くいただろうか。

帰りにミュージアム・ショップで、平沢さんの著作『人生に絶望はない』『母ちゃん、ありがとう』を購入して読んだ。不自由な身体を乗り越えて、ハンセン病の語り部の第一人者として、また障害者運動のリーダーとして東村山地域から世界にまで活躍される氏に尊敬の念をさらに深めた。平沢さんには、先の中見えない前途を自力で切り開いてきた人に特有の、公平さとやさしさがあつた。出会えてよかった。

今年になってからは、『朝日新聞』が、ハンセン病国家賠償訴訟で原告が勝訴した画期的な熊本地裁判決（二〇〇

り、しかも二〇〇一年からは毎年同園で無料コンサートを開催している、とのことだった。

この日、沢さんは塔さんの代表作「胸の泉に」を歌ってくれたほか、自ら塔さんの詩全集から選んだという「とどかない」、「証」、「涙」、「地球の傷」、「選ぶ」をピアノを弾きながら朗読してくれた。やさしく透き通るような美しい声と、見事なピアノさばき、詩への理解と傾注に感銘を受けた。彼女は合わせて、茨木のり子の「わたしが一番きれいだったとき」、アメージング・グレースなども歌ってくれた。一五〇人ほどが入れる会場は満席だった。私の前の席には偶々、一月に全生園を案内してくれた平沢さんがいらした。

コンサートの後、ロビーで「わたしが一番」の収録されたCDを買った。私は家に帰り妻に何も説明せずに、今日聴いた歌手のCDをかけた。初めて「わたしが一番」を聞いた彼女は、「魂がつぶやくような素敵な声ね。え、ピアノ弾き語りなの、優秀なピアノ伴奏者が付いているのかと思った」といった。それでは、八月末に大島で開かれる沢さんのコンサートに行ってみようか、ということになったが、うっかりしているうちに「満員御礼」となって

一年五月）の一〇周年にちなんで、「隔離の記憶」（一月二七日）二月一五日々刊・全一三回）を連載した。あらためて「隔離」政策の罪と、差別の壁を乗り越えようとした人々の勇気を思った。意外なことに最終回は、女優・吉永小百合さんと四国の離島の「国立療養所大島青松園」に暮らす詩人・塔和子さんの二年前の出会いと、塔さんとも親しい歌手・沢知恵さんの紹介であった。吉永さんは、ことに塔さんの詩「涙」に心をゆさぶられた、と書いてあつた。

先に述べた事情もあり、今年、このハンセン病資料館と全生園には行く機会をもてなかったが、ネットで調べたら五月と六月に、資料館で「いのちの詩」塔和子展が開かれ、彼女の代表作と、これまでの詩作活動の記録が紹介されると知った。ことに期間中の五月二十八日には、日韓両国で多彩な活躍をしている歌手・沢知恵さんが、塔さんの詩を歌うというので、企画実行委員会に電話をして席を確保していただいた。

当日、会場で配られた資料で初めて知つたのだが、沢さんは父親が日本人の牧師、母親も韓国人の牧師で、父親が赤ちゃんだった彼女を大島青松園に連れて行ったことがあり、その頃から塔さんはじめ園の人たちと親しくしてお

しまつた。

次に七月中旬に行ったのは、これまで全生園には駅からバスでしか行っていなかったもので、西武池袋線の秋津駅から一度歩いてみたかったのと、新聞『朝日新聞』五月一日（四日）が全生園に来春開園する、と伝えていた保育園の場所を確かめたかったからである。

秋津駅からは、「秋津停車場線」という都道を南に辿り、それが志木街道と交差する地点からさらに南に進むと、水量の少ないことからその名のある空堀川に架かる曙橋に着いた。ここまで二〇分くらいであった。この間、道の両側はほぼ住宅街であった。この日、川には全く水がなかった。曙橋を渡ると雑貨屋など店舗が数軒あり、さらに五分ほど歩くと全生園の現在の北の出入り口に着いた。そこを入ると直ぐ左手に永代神社、右手にテニスコートと野球場があつた。

秋津駅の開業が一九一七年というから、駅から歩いて二五分ほどのこの道を、患者や面会に来た家族たちは昔から複雑な思いで歩いたに違いない、と思つた。あの北條民雄『いのちの初夜』の主人公・尾田高雄も、この同じ道を通りかつての収容門から全生病院に入所したのである。

それと同時に、全生園に近づきながら再度確認した。誤っていた生涯隔離政策を別にしても、ハンセン病の専門療養所は患者にとつても、社会にとつても必要であった。全国に現在一三ある国立療養所の一つを、百年前に、他のいくつかの候補地が住民の反対で拒否された後、この東村山の人々は受け入れ、それから今日まで百年間ともに歩んできた。

永代神社に詣でた後、ショッピング・センター「多磨」(入所者自治会売店)の脇のベンチで冷たいものを飲んで、すると、時折、入所の人たちがお昼の買い物に来ていて、「お暑いですね」など挨拶の言葉を交わした。全生園の近くに住みよく散歩に来るといふ人とも話したが、彼は、「この人たちは本当に辛い思いを経験してきたから、誰もがやさしいのです」、といった。私はこの人もやさしい、と思った。この後、保育園建設予定地である全生園の南西の端に向かつて歩いた。着いてみると、その一角だけは樹木などがすでに伐採されていた。着実に計画は進行している。近年、全国の国立ハンセン病療養所は、入所者の減少と高齢化に伴い、将来療養所としての役割を失うことが確かなため、その地域への開放が検討されていると聞いた。

全生園(厚生労働省)は、その一環として、園内に民間保育園の開設を認め、その事業者を今年四月に正式に決定した。新聞によると、この決定を促したのは東村山市民と全生園入所者の皆さんであった。来年四月には、市内にある「花さき保育園」がここに移り開園する。

長い間、病気と社会的差別・偏見と闘ってきた人々、自分の子供も孫ももてなかつた人々が、曾孫に近い園児たちと交流する日が近づいている。東村山の「人權の森」は、さらに新しく生き続ける。

○ 六世紀 正福寺地藏堂

市の中西部・野口町にある正福寺。この有名なお寺のこともやはり全生園と同じように、東村山ふるさと歴史館で知った。初めて行ったのは四月下旬。西武国分寺線の東村山駅を降りて西方に、ごくゆるい勾配の長い坂道を一〇分ほど歩いた後、右折すると正福寺の山門が、住宅地を貫く道路の先に見えてくる。山門の前には二本のイチヨウの大木も立っていた。

ここには、何よりも国宝の「千体地藏堂」がある。建一四二七年)の前半期が、室町幕府三代将軍・後の北山殿として、南北両朝を統一させ同政権の最盛期を現出した足利義満の時代で、国際的には勘合貿易により中国(明)との交流が再開され(一四〇三年)、文化的にも民衆芸能「能」の全面的な開花期であったことである。

私は、能を自らの生産力に目覚めた中世民衆の自己主張と捉えている(本誌第二号「中世人 命を惜しんだ人々」参照)。この地藏堂も初めて見た時、私は思い込みかも知れないが、能に通じる当時の民衆の強い自己主張、自立への熱い願望を感じた。だからこそ地域の人々は、正福寺が臨済宗の一末寺にも関わらず、その後六百年、このお堂の屋根をその時期がくれば葺きかえるなど、営々と補修・維持管理してきたのであろう。

もう一つは、堂内には、江戸時代中期に盛んであった借り仏(地藏)信仰を物語る、当時の小さな地藏が千体以上収められていることである。八月のある日、私は運よくお堂の内部と小地藏を拝観する機会を得た。技巧的にはまちまちだが、寄進者は地元だけではなく、国分寺・小金井・所沢にも広がっており、近世多摩人の幸福希求の思いをひしと感じた。

物はさほど大きくはないが、屋根が二層になっている。その上方の屋根の軒の反りがきわめて美しい。これは中国から伝わった禅宗様建築の特色の一つだという。寺伝によると正福寺そのものは、一三世紀の末、時の執権・北条時宗の創建ということだが、この地藏堂については一四〇七年(応永一四年)に建てられたという記録が見つかっている。この建物の特長を東京都教育庁の解説資料から引用する。

「和様建築とは異なり、屋根の強い反りや白木の丸柱、花頭窓などは禅宗建築の特色を表し、華麗な色彩や彫刻もなく板壁で、弓欄間や三手先出組など、緻密で繊細な意匠となっています」。

関東で、この地藏堂と同じ禅宗様建築のお堂として鎌倉の円覚寺舍利殿がある。同じく国宝だが、ここは年間を通して年始の三日間、一月、文化の日の頃の三日間だけにしか一般公開されない。今年二月、遠くから微かにでも全体が見られたらと思ひ訪ねたが、その境内は修業道場ということで閉ざされ、残念ながら屋根しか見えなかった。私が正福寺の地藏堂にひかれたのは、円覚寺と違う「常時公開」のほか、二つの理由がある。

一つは、地藏堂が建立された時代「応永」(一三九四)

正福寺の吸引力は、この地藏堂の建物と内部だけではなかった。この堂の左側には六段・四柱の木製のケースがあり、木彫りの一二センチ位の小さな地藏が千数百体も並べられている。その説明板によると、これは七年前（二〇〇四年）に古い借り仏信仰の風習を復活させようとして始められたもので、地元の障害者が小地藏像の制作に当たり、一月三日の地藏まつりの際に三千円で売られ、買い求めた人は、家内安全、病気平癒、厄除けなどの願いの込められた小地藏を自分の家で保存し、一年後にお寺に納めるという。

さらに地藏堂の右側から正福寺の本堂へ行く途中には、五年前（二〇〇六年）に完成したという石造の「十三仏」、すなわち、初七日から三十三回忌までの十三回の追善供養の守護仏である、不動明王、釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩、地藏菩薩、弥勒菩薩、薬師如来、観世音菩薩、勢至菩薩、阿弥陀如来、阿閼如来、大日如来、虚空蔵菩薩が並んでいる。その建立碑には、この石仏のために浄財を寄進した人々の名前が両面にびっしり刻まれている。千人は超えているだろう。この十三仏と対面するたびに、東村山の人々の仏教への帰依の深さを感じた。

わせにも、このお堂のさわやかな魅力があった。

○ 選ばれた土地

今年になってから正福寺に行く機会はなかったが、五月下旬、これまでの東村山駅からとは違ったルートで同寺に行った。この市については、全生園、正福寺、徳蔵寺、板碑保存館、郷土資料館、それに市立図書館にしか行っていなかったことが、気になっていたからである。

JR武蔵野線の新秋津駅から、まず南に一五分ほど歩いて、志木街道沿いにある「平和観音」に詣でた。この観音像は第二次大戦の末期、一九四五年四月二日、この地に墜落した米軍戦略爆撃機B29の一人の死者を悼むもので、地元の篤志家・小俣権次郎が一九六〇年に建てた。八〇センチほどの穏かな表情の観音像は、爆撃機が墜落してきた北東の方向を向いていた。

富士山の溶岩で作ったという台座の裏には建立者の発願由来が記されていて、中に「……人類の永久の平和を祈願し 在天の英霊を慰め 慈悲を求め 本像を發願建立せし次第なり 散華の英霊願わくば我が意を汲み 安らかに

一月三日、「地藏まつり」の日が来た。私は朝九時ごろ到着した。地元町内会の人々がすでに露店などの準備をしていた。私はその傍らを通ってから境内を一巡した。一〇時からは同寺ご住職により厄除け地藏の開眼法要が執り行われ、引き続きミニ地藏を買い求めた人々がお焼香した。その後、隣接する八坂神社の前で、地元の保存会の六人による雅楽と、巫女四人の「浦安の舞」が奉納された。

お寺の前の自動車道もこの日ばかりは歩行者天国に変わり、地藏堂への参拝者は引きもきらず、食べ物の露店はどこもお客さんが列をなしていた。最高といってもよい天候にも恵まれ、仏も神も寄り添う心にしみるお祭りであった。また運よく、このお堂を取り囲む樹木の名前を、境内にいたボランティア・ガイドの方に教えていただいた。

お堂の一〇メートルほど斜め前面に二本のカシがすつくと立ち、両側面と裏面を、サクラ、シキミ、ボダイジュ、イチヨウ、ハナミズキ、シダレモミジ、ダイオウショウ（マツ）、ドウダンツツジ、モミが取り囲む。地元の人々が六世紀にわたり受け継いできた、主にヒノキを建築材にした装飾と色彩を控えた地藏堂の建物と、それを無言で守り飾る、生きている高さも形も様々な木々。この樹木の組み合

わり給へ」とあった。戦いが終われば敵味方なく慈悲を求め慰霊する、これが日本人の古来の伝統であった。これは、沖繩の「平和の礎」と同じである。

この石像の傍で偶々、建立者のご子息・小俣権次郎さんに出会った。「北東の方向」、「富士山の溶岩」など、小俣さんは当時の状況、ご尊父の観音像建立の苦心などを詳しく話してくれた。この観音様の立つ場所からは、全生園の森が見えた。小俣さんはまた、全生園には地元の人が職員として働くなど、昔からいろいろつながりがあった、病院のお医者さんは地元民の病気の治療もしてくれた、ともいった。このことは、林元園長も『回顧五十年』で書いていた。

このあと、再び新秋津駅に戻り、そこ（秋津町）から正福寺に向けて南西の方向（久米川町・諏訪町・野口町）に歩いた。その間には、由緒ある神社やお寺がいくつもあった。秋津神社・氷川神社・諏訪神社の社殿と境内はいずれも立派で、昔から地域としっかり結びついてきたと思った。地藏堂墓地には江戸時代の中頃に造られたという、一つの石柱に六体の地藏が刻まれた「一石六地藏」が安置されている。

次いで、すでに触れた村野四郎の友人、転居を繰り返したことでも知られる草野心平（一九〇三〜一九八八年）が、亡くなるまでの二五年間を過ごした「五光」地区に行った。その秋津橋の袂には、彼の筆になる「光あまねし」の石碑が立っていた。後で、心平が地元の人々にいかに愛され、尊敬されていたかを知った（小池昭一「心平さん逝って二十年 在りし日の素顔を偲ぶ」『東村山市史研究』第一六号参照）。

曹洞宗の名刹・梅岩寺には、江戸時代後期に造立された、四国霊場巡りと同じ功德が得られるという「新四国石仏」の八八体が今なおきちんと揃っており、この地の人々の信仰の篤さを伝えているようだった。石碑の保存で知られる徳蔵寺にも立ち寄り、有名な「元弘の板碑」（一三三三年造立・国の重要文化財）を拝観した。その碑は、鎌倉幕府の滅亡となる、久米川に継ぐ分倍河原ほかの合戦で亡くなった仲間の武士を追悼するものであった。また、『東村山市史』によると、古代、この徳蔵寺の辺りを東山道武蔵道が通り、平安時代には、病む旅人に介護と援助の手を差し伸べた「悲田処」^{ひでんじょ}が設けられていた、と推測されている。

正福寺の近くには、不動明王と水子地藏尊を祀る「野口のお不動さま」として近郷にも知られた「大善院」（天台宗）があった。そこには、八六年前に造られた七メートルの築山に不動明王と三十六童子が配されていた。水子地藏堂の外側には、数え切れないほどの小さい水子地藏像が安置されていた。最後に正福寺に着いた。六世紀もの年輪を刻み、今なお秀麗な姿を留める地藏堂。これを守り続けてきた地元の人々をあらためて思った。

一年半前から東村山を何度か訪ねてきたが、ようやく、この地が、九世紀には療養施設「悲田処」の所在地、一三世紀に北条執権政府によるとされる正福寺の創建、鎌倉と北関東を結ぶ鎌倉街道の宿場町、鎌倉幕府滅亡の嚆矢となる久米川の合戦、江戸時代に起こり近郷の人々をも参加したという正福寺の借り仏信仰、二〇世紀初頭における全生病院の設置、第二次大戦末期の米軍爆撃機B29の墜落と平和観音の建立、近年の東村山市による「人権の森」宣言、来年の民間保育園の開園決定など、いずれも多摩の他のどの土地にもなかった様々なることを経験してきた、ということに気づいた。

東村山は古代から現代まで、いわば歴史によつて選ば

れた土地であった。この人々は、選ばれたことの責任をきちんと果たしてこられた。東村山で出会った人たちは、誰もが親切であった。慈悲の心がいろいろいるところで形になつていた。草野心平がこの地に永久の住処を見いだした理由がよく分かる気がした。それは、この地に古くから根付いてきた信仰の力にもよるのであるうか。

○ 詩人・塔和子さん

実は、二〇一〇年のとくに前半期において、私の多摩巡りを気持ちの上で支えてくれた本が一冊あった。それは、『希望よ あなたに―塔和子詩選集』（編集工房ノア・二〇〇八年刊）であった。文庫本なので、出かける時にバックに入れ電車の中、昼食時など公園のベンチ、お寺の境内などで折々にページをめくり、選び抜かれた言葉に感じ入り励まされた。

塔さんの詩の中でも、五日市の広徳寺の山門と本堂の間立つ、二本のイチョウの巨木を見た時、「古木」はこの木のために書かれたとも思った。

あなたがそこに在るだけで / なによりも力づよい / りいんとした存在の内側から発する声をききながら / 大きな安逸を与えられ / 深い / 深い思いにたたされる (略)

この本のあとがきで知ったのだが、彼女の才能を見出した現代詩人の一人は、先に書いたように、府中人・村野四郎であった。同書の「塔和子年譜」によると、「一九五八年・二九歳 この頃から短歌から詩の創作に転向」とあり、彼女自身の「後記」で、「その頃、NHKラジオに療養文芸という番組があり、毎月、川柳、俳句、短歌、詩、随筆と交互に放送され、詩の選者を村野四郎先生がなさっていました。私は最初短歌から詩の道へ入ったのですが、投稿しましたら思いがけなく入選し、その後もほとんど投稿するたびに入選し、だんだんと深みにはまりまして現在に至っております」と記されている。

塔さんは一九二九年に愛媛県で生まれ、一四歳の時にハンセン病により、香川県にある離島の国立療養所大島青松園に入る。一九六一年、第一詩集『はだか木』以降、二〇〇三年の『今日という木』までに一九冊の詩集を世に

送った。二〇〇四年と六年には『塔和子全詩集』全三巻が刊行される。詩作を始めてから半世紀以上、彼女を励ましてきた人の中には、村野四郎のほか、詩人の永瀬清子（一九〇六―一九九五年）、大岡信氏もいた。著名詩人だけではなく、全国のファンも彼女を支えていた。「塔和子展」では、彼女が保存していたファンレターの数え切れないほどの束が展示されていた。

塔さんが最初に広く注目された第三詩集『エバの裔』（一九七三年）の題字は、彼女が「心ひそかに御師」ときめて慕っていた村野四郎の筆によるものだし、第四詩集『第一日の孤独』（一九七六年）には、永瀬清子が跋を寄せ、「彼女は、大きな物事の関係を考えながらなお皮膚感覚を失なわない詩人です。……亡き村野四郎氏も彼女はすばぬけてよい詩人だ、と私に語られた事があり、私はわが事のように誇らしく思ったのです。又「エバの裔」は大岡信氏をはじめ多くの詩人の注意を引きました」と書いた。

現代日本における女性詩人の先駆者的な存在であった永瀬清子は、一九五二年からハンセン病療養所の一つ、長島愛生園（岡山県）で詩の指導をしていたばかりでなく、一九六〇年には、自ら主宰する詩誌『黄薔薇』に塔さんを

同人として迎え発表の場を提供していた。私は、塔さんの作品を辿っているうちに永瀬清子という名前を知り、初めて『現代詩文庫・永瀬清子詩集』を紐解いた。「グレンデルの母親は」、「諸国の天女」、「踊りの輪」、「女の戦い」のような、女性の繊細さと母性の強さを表現した名詩と出会えたことは、大変幸運であった。

最後に内輪話を一つしたい。今回の多摩巡りを陰で支えてくれたのは、車の運転手でもあった妻だった。私が一人で行った日も、夜の食事時に私が一方的にしゃべる、その日の見聞と感想を忍耐強く聞いてくれた。このエッセイに何か取り柄があるとすると、彼女のお陰である。

塔さんの詩「平和」を引きたい。「尖ったかけら」は詩人だけが見つけられた言葉であり、「あなた」は彼女の夫、故・赤沢正美だが、「私とあなた」は私たちのようでもある。

私は／尖ったひとつの／かけらだから／もうひとつの／かけらを探した／それはあなただ／以来／共に／楽しみ／怒り／悩み苦しみ／ひとつになった／ふたつのかけらは／たびたび

こわれたが／また／じんわりと／ひとつになつて／まるく／平和に／暮らしている